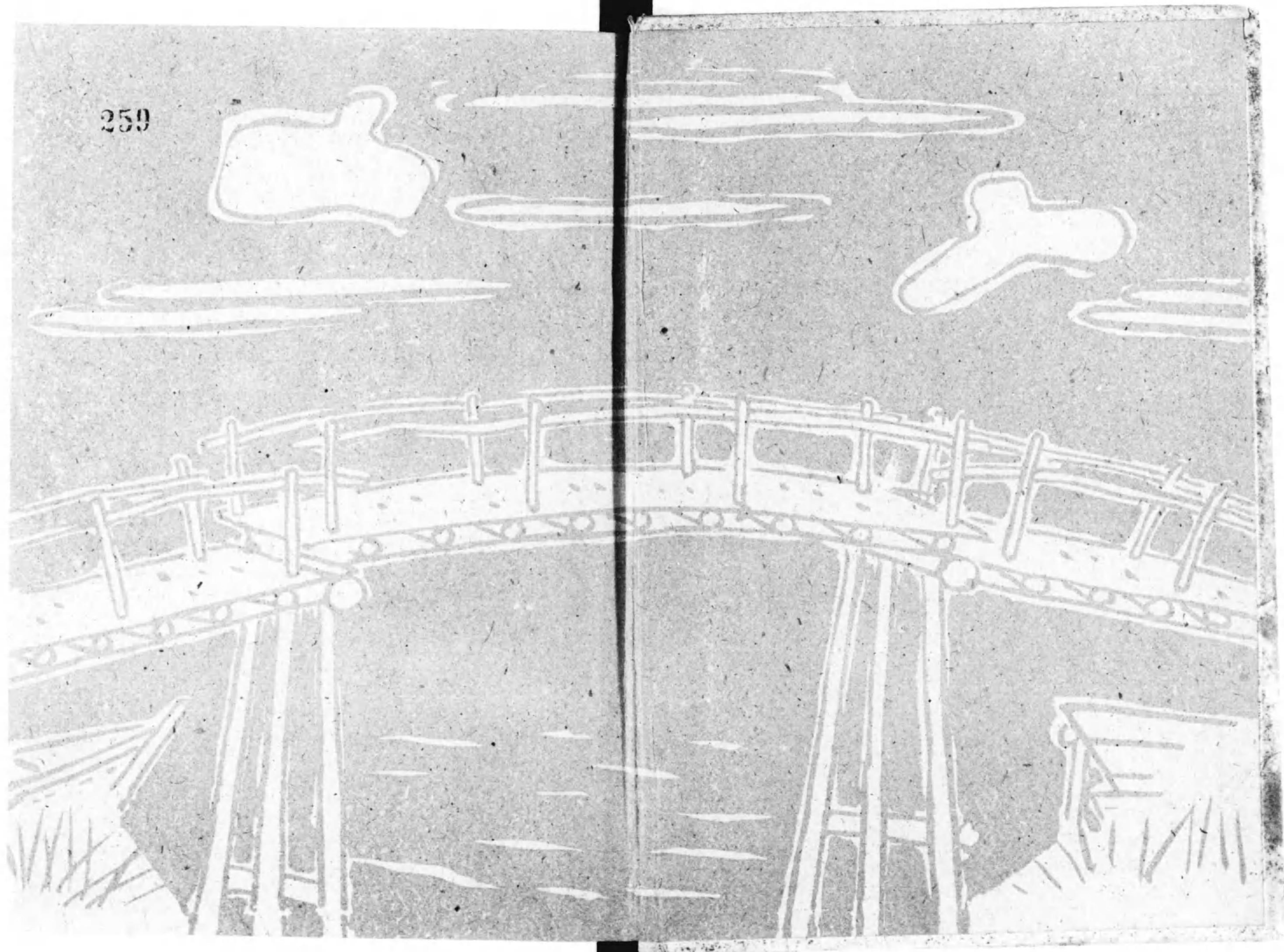




始



259



特 232  
555

# 南海北日本刀

之我在乎的意



大衆文藝社版



作

爲

今、日本人は、大きな運命の道を拓きつゝある。大東亞十億の民の共榮のため、全國力を擧げて、必死不退轉の努力をつゞけつゝある。

いふまでもないことだが、この現下の時局と、さきに我々の祖父たちが體驗した明治維新の時局とをくらべてみるなら、比較の許されないほど、今の情勢は、威大な緊迫の中にあるのだ。

それは、明治維新の時の如く、單に國內的問題を整へるだけで満足出来ない事情にあるからで、即ち、大東亞の盟主として、指導者として、戦ひつゝ、大いなる新しき土の建設に邁進してゐるからである。

それでゐて、明治維新當時の志士の血管に漲つた國家意識が、今、そつくりそのまま、我々の體軀に蘇つて來たのだ。あの祖父たちの魂が、ハツキリと我々の胸に呼び醒されたのだ。

我々の體内には先天的に、勤王の血が流れてゐる。尊王、攘夷、報國の大精神が、脈々として生きてゐる。

爲 今や時局は、その血潮を要求してゐるのだ。

作  
 この時に當り、作者は、彼の明治維新の動亂期を懐古し、その時世に犠牲となつた志士の生涯をこゝに再現して、それを我々の師表とするには無駄でないと思つたから、「小説日本歴史」の第五作として「南海の日本刀」を贈る次第である。

爲  
 昭和十七年新秋

久我莊多郎

目次

---

大和義舉……………	(三)
旅の人の……………	(七〇)
禍を呼ぶ酒……………	(九九)
身代り就縛……………	(一四七)
獄舎の歌……………	(一八八)
紅涙吉田驛……………	(二五八)
北越の絶唱……………	(三〇七)
後記……………	(三五九)

---

小説日本歴史

南海の日本刀

久我莊多郎

大和義學

一

——暑い。

瀬戸の内海から吹き上げる潮風は爽かであるが、南國の蒸し暑さは、また格別と思はれた。たつた今、こゝ丸龜の港へはいつた金毘羅船から降りた旅人たちは、誰いふとなく、

「暑いろう」

「さすがは南國……」

と、口々にそれを洩らすのだつた。

その旅人の群れにまぢつて、同じ丸龜の土を踏んだ旅の男がふたり。

旅人の殆んどが、丸龜の城下を横に見て、まつすぐ道を南にとり、金毘羅目ざして行くのに、

この二人は、

「魚屋町の越後屋といふのは？」

その濱にわた船頭に問ふてゐた。

越後屋といへば、城下でも名だたる醤油醸造の老舗である。

「あア、越後屋さんかね」

すぐに知れた。

教へられた旅のふたりは、船頭が指さす道を、城下へはいつた。

仰げば、いかめしい白亜の城廓が、のしかかるほど近々と見られるのである。この城は、慶長二年生駒親正が築いたもので、萬治元年から京極氏の居城となり、當代の京極佐渡守朗徹は、その第七世であつた。京極氏五萬千五百石の丸龜城下の股賑は、讃岐國でも高松に次ぐ華やかさであつた。天保年間以來、殊に丸龜の新堀築港が完成して以來の城下の繁華は素晴らしいもので金毘羅參詣客の殆んどすべてを、この港が吞吐してゐたといはれるほどである。

——さて。

旅の二人がたづねる越後屋は、その店舗の宏莊に、

「おオ、こゝか」

魚屋町に、ひときは目立つてゐた。

顔を見合つた二人は、何といふことなしにニツコリして、菅笠の紐を解いた。

「ごめんなさい」

土間へはいると、帳場にゐた若い手代が、

「はい。どちらから？」

「大和からまりましたが、——内儀さんに、お取次がねがひたうございます」

「大和から？」

話は、それだけでよく通るらしかつた。

奥へはいつた手代は、すぐに引返して来て、

「お待ち兼ねでございました。さ、どうぞお通り下さいませ」

下へも置かない、鄭重なもてなし振りである。

通された奥屋敷。庭木の手入れも行き届いてゐるし、打水にシツトリと濡れてゐて、炎天を歩いて来た旅の二人には、蘇生の思ひを感じさせるほど、涼やかな座敷であつた。

待つ間もなく、

「ようお越し下さいました」

その言葉も、物腰もやはらかく、そこへ姿を見せたのは、この家の女主人箒子である。

齡は、まだ四十に間があるであらう。さすがに、村岡と苗字を許される大家の内儀。物に動じない落付きが見られるのである。

二人は、すこし膝をにじらした。

それまでの町人口調が、いつべんに武士のいかめしさである。さう気がつけば、その態度にも一分の隙も見出せない。

年配の方が、問ふた。

「越後屋の御内儀ですか？」

「はい。村岡箒子でございます」

「おオ。——お初にお目にかゝるが、拙者は大和の林豹吉郎」

つゞいて、いま一人が、

「乾十郎でございます。中川宮に伺候いたして居る」

「お名前は、かね／＼承つて居りました」

箒子は、しづかに會釋する。



「かねてお便りがござりました故、今日はお越しあそばすかと、毎日のやうに、お待ち申上げて居りました」

「御内儀——」

乾十郎が呼んで、

「およろこび下さい。いよいよ、大和舉兵の日が近づきましたぞ」

「おオ」

箏子の頬に、紅色がのぼつた。

「それでは？」

「うむ。前侍從中山忠光卿を主將にいたゞき、備前の藤本鐵石、參州刈谷の松本奎堂、土佐の吉村寅太郎を總裁として、大和五條、ならびに十津川郷の義兵一千餘が參加し、尊王倒幕の御先鋒を相つとめる日が、いよいよまゐつたのでござる」

「林さま——乾さま」

箏子は、聲を弾ました。

「して、舉兵のおん名は？」

「天誅組……」

林豹吉郎が、確固として答へた。

「天誅組……天誅組」

箏子は、うつゝのやうに繰返すのだつた。

林豹吉郎は、大和の砲術師で、天誅組舉兵には兵糧方として活躍し、この時、齡は四十七歳。

また、大和五條の住人乾十郎は、醫師森田節齋の門下で三十六歳。いづれもこの舉兵に壯烈な討死を遂げ、後に朝廷から正五位を贈られた人たちである。

一方、村岡箏子は、女ではあれ、勤王報國の一念に燃えた立派な志士であつた。

彼女の父は、小橋道寧といつて讃岐國香川郡圓座村の醫者であるが、江戸昌平費にはいつて柴野栗山、尾藤二洲、古賀精里らについて學んだ人格の高い學者だつた。

その道寧の長子が小橋安藏、贈正五位、次男が順二（贈從五位）、長女が箏子（贈從五位）で、箏子が越後屋の村岡藤兵衛に嫁して生んだ子、宗四郎が贈從五位、また安藏の娘婿たる太田次郎は贈正五位、安藏の長子友之輔は正五位を贈られてゐるといふくらゐ、一門から勤王贈位の譽ある人を輩出してゐる家柄だつた。

だから、當時から志士の間では、

「讃岐の名和氏」として、小橋家一門に對しては敬意を拂つてゐたといふ。

そんな勤王名譽の家に生れた箏子だから、夫の藤兵衛が病歿したあとの醤油醸造の老舗を女手一つで切り廻す一方、遺子宗四郎の教育に心を砕き、その傍ら、名を金毘羅參詣に假りて、讃岐へ来る志士たちのため、随分と力を盡してゐた。

女主人の老舗で、若い者を澤山使つてゐる醤油屋といふのは、まことに志士を潜伏させるのによい條件だつた。また、箏子は、兄安藏の意圖をうけて、家宅を志士の潜伏に提供したばかりでなく、越後屋傳來の財産も、惜まず同志の資金として使つてゐた。

現在の丸龜市魚屋町五十番地吉田喜美子氏宅は、かつての越後屋の家宅であるが、當時の志士たちが潜伏した地下室が、いまもそのまま残されてゐる。東西二間、南北一間半、深さ六尺餘、周囲は花崗石の組疊で、底は漆喰で固められてゐる。

こんな話が、傳へられてゐる——。

箏子は、毎日、下女に、

「けふは、御飯は四升ですよ」

「けふは、五升いりますよ」と命じた。時には、一斗の御飯が、いつ誰が来て食べるのか、空櫃になつて臺所へ歸つて來たといふ。

越後屋の外堀下が大きな下水道になつてゐて、これが丸龜港口にまでつゞき、中は人がユツクリ通行出來たから、志士たちは、この間道をつたつて越後屋の地下室に出入してゐたのだつた。

——大和義舉のことを報すべく、林豹吉郎、乾十郎の二人が連れ立つて、村岡箏子を訪ねて來たのも宜なる哉。

「林さま——乾さま」

箏子はまた、二人の名を呼んでから、

「して、そのお旗擧げの日取は？」

と問ふた。

それに答へて、乾十郎が、

「こゝ二三ヶ月のうちに、ことを擧げられる豫定だが……」

「二三ヶ月のちに？」

「左様」

と、大きく頷いてから、居儀を正して、

「去る四月十一日、主上におかせられては、石清水八幡宮に於て、攘夷を祈らせ給ふたことを、御内儀にもお聞き及びであらう」

「はい。畏きことと存じて居りまする」

「来る八月には、大和の畝傍山行幸のことを御内意あらせられてゐる。これは、攘夷の御祈願のためとあるが、その實、錦の御旗を關東にすゝめ、軟弱な幕府を倒し、王政に復古し給ふ御計劃である。わが天誅組は、その御先鋒をうけたまはるのでござる」

「おオツ」

箏子の頬に、またしても紅色がのぼつた。その聲に濕つたものが含まれてゐるのは、女氣の、隠し切れぬ感動に、涙を覚えてゐるのではなからうか。

「畏きこととござりまする。皆さまの御苦心が、今こそ報はれるのでござりまする。林さま、乾さま。畏きこととござりまする」

「——御内儀」

こんどは、林豹吉郎である。

「ついでには、かねてお願ひ申上げてある彈藥製造のことであるが、如何であらう。萬事、疎漏なく運んでゐるであらうか？」

「そのこととござりますれば……」

箏子は、ニツコリした。

「お約束どほり、いつにても御用に立ちまするやう、準備いたして居りまする。後刻ごらんに入れまするが、彈藥、加兒波尼電器、白砲など、すべて地下室に貯藏してござりまする」

「かたじけない」

林と乾は、顔を見合つて頷いた。

越後屋は、尊攘派の志士を隠匿するほか、こんどの大和義舉に、一つの役割を受持つてゐた。それは、いまでも話に出たやうに、彈藥の製造であり、加兒波尼電器、白砲その他の兵器の整備であつた。

當時、讃岐の丸龜藩は、雷管製藥係を補充し、三川右治馬、戸祭内蔵の指揮によつて、着々彈藥を製造してゐた際だから、越後屋のこの事業も、案外都合に運んだものである。これには

主として小橋安藏、太田次郎、村岡箏子らの一門のほか、鮎川一雄らも参加助成したのだつた。  
「かたじけない」

林豹吉郎は、重ねていつて、軽く頭を下げた。

「されば、擧兵の日が決定次第、それらの品は、早急に積出していただきたい。その日は、改めて御通知する」

「心得ました」

と、答へる箏子の聲を聞いて、林も乾も、ホツとくつろいだ表情になつた。

箏子は、思ひ出したやうに、

「では、この欣びを、榎井の加島屋さんにも、お知らせいたさねばなりません。加島屋さんも、きつとお欣びなされませう」

といつた。

乾十郎が、聞き咎めて、

「榎井の加島屋？ 御内儀、加島屋といふのは、何者ですか？」

「御存知ありませんか」

箏子は、微笑をふくんだ。

「加島屋さんは御存知なくとも、讃岐の日柳燕石先生の名は、御承知でありませう」

「おオ、燕石先生！」

乾は、林豹吉郎を見返つた。

「燕石先生の名を、知らぬ者はあるまい。彼の人の詩の、日本に聖人あり、其の名を楠公と云ふは、拙者も、常に愛誦してゐると、ろだ——。御内儀、燕石先生が、その加島屋なのか？」

「左様でござりまする。加島屋長次郎さんといへば、讃岐切つての大親分。日柳燕石先生といへば、人も知る勤王の大家……」

「うむむ。燕石先生は飲博の徒、と聞いてはゐたが、やはり事實だつたのか」

市巷の俠客たる加島屋長次郎こと日柳燕石が、勤王の大家として唱はれることに矛盾を感じるやうに、乾十郎は、ひく、呻いた。

林豹吉郎が、そのあとを引きとつて、

「御内儀。お言葉のやうに、天誅組擧兵の近づきしことを、燕石先生まで、ソツと御通告ねがひたいと考へる」

「はう」  
「かつて燕石先生は、越後の本間精一郎どのに、擧兵のことを傳へ聞かば、直ちに讃州健兒三百を参加せしめるであらう、とお約束なされたさうな。拙者は、そのことを松本奎堂どのからうかどつてゐる」

「はい。先生が南海の親分であることに、とかくの批判をする人がありますが、先生の大腹中は、わたしなどには窺へませぬ。たゞ、烈々火のやうな先生の勤王心には、常に胸打たれてゐるわたしでござりまする」

「……………」

林と乾は、黙つてまた顔を見合つた。

長い夏の日も、いつの間にか暮れなづんで、たそがれの色がヒタ／＼と、その縁ばなへ迫つてゐた。

ソヨと吹く風に、風鈴がゆれて、妙なる音を傳へる……。

二

日本に聖人あり

其の名を楠公と云ふ

誤つて干戈の世に生れ

劍を提げて英雄となる

楠木正成を英雄と稱し、忠臣と論じ、軍神智將であると詠んだ詩歌は、世上に數多く流布されてゐるが、楠木正成はもと／＼聖人であつたと観たのは、南海の大親分と唱はれ、讃岐の勤王侠客と呼ばれる日柳燕石である。

この聖人をして英雄たらしめたのは、亂世といふ時代であつた。すなはち、無事泰平の聖人は干戈亂世の英雄であり、戦國の英傑は、すなはち泰平の聖賢であつて、兩者は一にして二にあらず——と達觀したものだつた。

この五絶は、弘化二年、日柳燕石が二十九歳の作であるが、當時の志士は、好んでこれを受誦した。ことに長州の吉田松蔭門下の志士によつて喧傳され、酒間に於て必ず順次この一句を吟じたといはれる。

日柳燕石は、名を政章 字は士煥、通稱を長次郎、又は耕吉とも稱してゐた。

彼は、讃岐國那珂郡榎井村、即ち現今の香川縣仲多度郡榎井村の人で、文化十四年に生れ、家は近郷屈指の素封家で屋號を加島屋と呼び、質商を営んでゐた。だから、青年期ごろまでの彼は飽食暖衣に明け暮れる加島屋の若旦那、長次郎であつた。

燕石は、七八歳の幼年時代に叔父の石崎近潔の塾にはいつて學び、長じて三井雪航、岩村南里に就いて經史詩文を、また奈良松莊に國學歌學を學んだ。彼が國事に盡瘁するに至つた萌芽は、すでにこの時、これら時代の先覺者の薰陶によつて、はぐみ育てられたとみるべきである。餘技としては、書道、繪畫、彫刻の道にも秀で、またその非凡な文學的識見は、多くの遺著によつて知られるし、彼が世の常の無節操、無頼の徒といはれる博徒の親分でなかつたことは、これによつても知れるのだつた。

彼の出生地たる榎井村は、有名な象頭山金毘羅大權現を祀る琴平の門前町につゞいた、きはめて自由な村里だつた。

この地は、高松領、丸龜領、多度津領、天領、金毘羅領といふ五つの異つた領地の寄り合つた土地で、殊に榎井は幕府の直轄地、いはゆる幕領、天領といはれ、遠く備前倉敷にある代官所の支配をうけてゐたから、當時の法令なども殆んど行はれない土地であつた。

それかあらぬか。

諸國の志士が燕石を訪ね、その庇護をうけたといふのも、燕石の熱と力の勤王心に加へて、この榎井が天領といふ名で法令が行届かず、志士たちの潜伏に都合がよいからだつた。

しかも琴平の地は、いはゆる「讃岐の金毘羅さん」で名が高く、その信仰は全國津々浦々まで行きわたつてゐるから、朝に夕に、この地に入入りする人数はおびたゞしく、志士は、それらの人にまぎれて往來するに便利であつた。その上、人の集るところ必ず各様の話題がのぼるから、最も新しく、最も重要な天下の情報を居ながらに聞き取ることが出来たからである。

そして、こゝには、關西で羽振りを利用してゐる勤王博徒の親分、日柳燕石が、大きな翼をひろげて待つてゐるのだ。

この燕石の庇護をうけて、讃岐に潜伏した志士は、

桂小五郎（後の木戸孝允）、高杉晋作、品川彌二郎、藤本鐵石、本間精一郎、松本奎堂、長尾秋水等々、

の多きにのぼるのだつた。

それは後の話であるが――

扱て。

燕石は、二十一歳の春に父の惣兵衛を、その夏に母の幾世を失つた。彼は、父の家業を繼ぐと間もなく、家財を傾けて後、貸元の看板を掲げた。

時に、國防論の擡頭する天保末年だつた。

燕石の犠牲的な俠氣と、清濁併せ呑む豪放な氣魄とは、また、く間に數百千の乾分を集め、加島屋の旦那、長次郎親分と立てられて、南海の俠客たる名を響かしたが、この榎井の長次郎親分は、尋常一様の博徒の元締ではなかつた。

彼は、常にかういつてゐた。

「おれがこの渡世に身を入れたのは、おれの志を遂げるためなんだ。見てゐるがいゝぜ。やくざ稼業の加島屋長次郎も、今に日本のお國のため、お役に立つ時があるんだ。その時が、もう近づいてゐるんだぜ」

また、乾分たちにも、かう教へてゐた。

「お前たち、命を大切にしろ。行ひをつゝしむがいゝぜ。お前たちの命は、お前たちのものであつて、お前たちのものぢやないんだからなあ。誰のものだと聞くのか？ 勿體ねえ

ことだが、天朝さまに捧げたものなのだ。そのことが、ハッキリとわかる日が今に来る。賤しい稼業の博徒にも貴い仕事で死ぬ日が来るんだ。その時こそ、おれも諸共、お前たちの命も、纏めて捧げねばならねえんだから、命を大切にしろ。行ひをつゝしむがいゝぜ」

金毘羅領には、お相撲上りの蘇鐵山光藏、備後屋九平などといふ貸元がゐて、加島屋一家とはかくソリが合はなかつたから、ともすれば流血の惨の持上るやうな事件が起つた。

そんな時、燕石は、きまつてさう乾分たちに説き聞かせて、妄動をいましてゐたのだつた。

弘化元年四月、燕石は、親友の富山凌雲とともに九州を巡遊した。

時に、長崎では、阿片戦争による隣國支那の危機が蘭人の口から傳へられ、心ある者の眉をひそめさせてゐた。

天保十三年の阿片戦争によつて、英國が支那から奪取した利権の第一は、香港だつた。第二は二千百萬ドルの償金であり、第三は上海、廣東その他五港の開港だつた。

對岸の火災ぢやない——心ある者は、さう警め合つた。

燕石も、また、

「近代西歐の諸國は、好んで同盟を結び、それ／＼國威の伸張を計つてゐるが、中でも露國と英

國は、連衡の策をもつて東洋に出没しはじめた。これア由々しきことだ。東洋の獨立國も、また單力でこれを防ぐことを考へておちやならない。日本と支那は、もとく一衣帶水の關係にあるんだから、一時も早く親善を結んで、露國と英國の毒牙を防がねばならんが……」  
と慨嘆した。

嘉永元年、燕石はまた、阿波の徳島から京阪地方へ渡つて、京都を中心に集つてゐた天下の志士たちと交つた。榎井へ戻つて來たのは、數年後のことであるが、その頃はもう、彼の名聲は、志士の間にはひろく傳はつてゐた。

「憂國の詩人で博徒の親分。それが日柳燕石だ。痛快ではないか」  
といふのである。

その頃の彼の作に、

賊々々、

天子に敵するは、皆これ賊なり、

賊々々、

國賊は、獨り外國の賊のみならざるなり。

といふのがある。

「わが國を犯さんとする外表は、もちろん賊であるが、國內にあつて、天朝に背く徒あり。九重を輕んずるの輩あり。これを國賊といはずして何ぞや」

との意味であるが、まことによく喝破して、幕府要人の心膽を寒からしむるものである。

燕石の國防軍備論に、かうある。

西歐の國、大なる者を顎羅といひ、強き者を英吉といふ。其人皆狡黠多智、専ら詐術を用ひて宇内を蠶食し、諸島漸くその版圖に入る。然り、しかして儼然屹立してその侮を受けざる者は、獨り本邦あるのみ。(中略) 然るに去年浦賀の事、夷人頗る不遜之狀あり。しかして十萬の官軍坐視して一丸を發せず、如之、世の議或は之に通商を許さんと欲する者あるは果して何故乎。蓋し太平の極、俗少華を崇びて稍武備を忘れ、干戈を度外の所に置きたため然る耶。抑も肉食長袖は徒らに偷安姑息の計を作る耶。余也僻境の書生、才識謏劣なれども猶之を聞く毎に膽張り、背裂け一劍に依りて力を邊疆に致さんと欲す。而もいはんや、堂々二百六十餘藩豈一人の英雄男子なき乎。

肝膽をえぐり出した大文字である。



露國は大陸から、英國は印度洋からわが邊海に出沒し、米國まだ捕鯨を名として、太平洋からわが近海に迫つてゐる時、燕石は、防備の實なきを憂へたのだつた。

當時の國內は、攘夷、開港の二論に騒然としてゐた。

ある者は極端固陋な攘夷論を唱へ、あるひは頑冥不靈な鎖國論者あり、また攘夷にして非戰論平和開國、妥協不戰の開港論……等々、まさに鼎の如き有様だつた。

燕石は、攘夷であつたが、鎖國は採らなかつた。英米露を賤惡したが、開港通商を斥けなかつた。攘夷といひ、開港といひ、通商といひ、あくまでもみな國家的、國防的觀點に立脚してゐたのである。

彼は、その開港論で、かういつてゐる。

(前略) 然り、而して大艦巨砲(大砲)の製、いまだ善美を盡さず、是實に昭代の一大缺點と謂ふべし。

私かに聞く。近來東洋、大鯨(米國)鬚を浦賀に奮ひ、北長蛇(露國)、蝦夷に垂涎す。此二賊は固より異能奇才あるに非ず。神算鬼籌あるに非ず。其挾む所、以て四方を凌轢する者は砲(砲)と艦あるに止まるのみ。然り而して沿海の國は防禦に奔走し、頗る騷擾を致す。

嗚呼、堂々たる神州にして、蠢爾裔夷(事理を辨へぬ外夷)の一小枝を憚る者は果して何ぞや。蓋しその術に通曉せざるの故なり。臣聞く、都見の砲礮に於ける、峩羅の舟艦に於ける其の法、皆近代に開け、而して二國今以つて威を西歐に震ふ。是に由つて之を觀れば其の術の易々、知るべきのみ。

謹んで按ずるに、古昔、天朝留學生を支那に遣はすの舉あり。且昭代の初、屢々人を西洋に遣はして以て虜情(異國の事情)を偵せしむ。今宜しく其の例に因つて、英俊の士數輩を選んで、彼の土に入らしめ、以て其の術を研究せしむべし。本邦の人は資性敏捷、三五年を過ぎずして其の秘蘊を極むるや必せり。

議する者或はいはん。本邦弓馬精強なれば、大砲は無用なり、海港は淺狹なれば巨舟は使ひ難しと。是所謂、膠柱の論、井蛙の見のみ。夫れ本邦は四面海を環りて遠く夷虜と潮脈相接す、舟船去來、朝に夕に待たずして行く。何ぞ水戰を習はずして可ならんや。

且つ二百年來、宇内の形勢大いに變じ、同盟の政、貿易の風盛んに萬國に行はれ、その勢は駸々乎として殆ど防ぐべからざる也。然らば則ち航海通商の法は、亦宜しく我よりして始むべき也。

大艦已に具り、巨礮亦成ならば、事なければ則ち朝に漢産を運び、夕に蠻貨を輸して、其の利を収めて國用に給す。事あらば則ち西、英夷（英國）を征し、東、墨房（米國）を撃ち以つて國威を萬國に觀し、勢に乗じて宇内を併呑するは、或は難しとなさざる也。是れ外以つて敵を禦ぎ、内以つて國を富ます、一舉兩得の長策也。

（中略）則ち臣諷劣と雖も、請ふ西行の撰に入らん。亦自隗之意あるなり。

この策が容れらるゝならば、身をもつて實踐しようといふ燕石だつた。  
燕石はまた、その烈々たる氣魄を、かう詠んでゐる。

英は英にあらず、

魯は眞に魯なり

外國の王は皆賈豎なり

わが弓は強く我劍は長し

肯んぞ此奴の帝郷に

近づくを容れんや

英露の王は元來商人である。わが弓、わが劍さへあれば、夷を攘ふことは容易である。何ぞ恐

るゝに足らん、といふのだつた。

人は言ふ南虜は悍なりと

人は言ふ北虜は健なりと

我に三尺新磨の刀あり

何れの虜の頭上にか利鈍を試みん

燕石は、常に、

「詩は志である。口を衝いて出るものこそ、眞の詩なのだ。わしは、世人のいふ所謂詩人の詩は作らないよ」といつてゐた。

と

さればこそ、燕石の詩には、自然から迸る眞情の、人を動かすものがあるのだつた。

愛國詩人として、日柳燕石の名は高い。

ある日――

燕石に、かう注意した者があつた。

「あなたは、志士として詩人として、今は天下に隠れもなき燕石先生である。いつまでも、博徒

の親分でもあるまいぢやないか。こゝらあたりでやくざの足を洗ひ、さうした連中を近づけぬがよいと思ふが……」

燕石は、明るく笑つた。

「は、は、は、御忠言はかたじけないが、ものは考へやうではなからうか。詩人がばくちを打つといふのなら、人の聞えも悪からう。しかし、ばくち打ちが、時たま詩の二つ三つを作ると思へばさして不都合はない、と考へる。わしは、さう信じてゐるのだが……」

と、取り合はうとしないのである。

重ねて、その非をなじると、

「わしも、單なる博徒で終らうとは思はない。燕石がこの道に投じたのは、すこし考へがあつたからだ。ま、長い目で見てゐて下さい。今に、わしの眞意がわからうから……」

心の底で期してゐることを、チョツピリ、言葉勤なに洩らしただけだつた。

三

姦しく鳴いてゐた油蟬の聲も途絶えて、榎井の里に夜が來た——。

燕石は、榎井にある我が家を「吞象樓」と名付けてゐた。寓居の西に聳えた象頭山を望み、二階の燕石の居間で盃を傾ける時、象は常に杯中に影を浮かべるので、「象山を呑む」の心意氣から、吞象と命名されたのだといふ。また、「四時皆宜樓」の別名があるのは、春夏秋冬、四時の眺望が皆よいからであるし、家の前に老松が一樹あつたところから、双松樓、双龍閣ともいはれたが、吞象樓の名がいちばん高かつた。彼の居間にも、犬塚製水揮毫の吞象樓の三字額が楯間に掲げてあつた。

この吞象樓は、高松街道が盡き、やうやく金毘羅の町に入らんとするところ、興泉寺前に位置してゐるから、最も地の利を占めてゐて、こゝで見張つてさへゐたなら、往來織るやうな街道の人物を見通すことはなく、まさに街道の急所、咽喉首に相當してゐたから、燕石が胸中深くに期してゐる大事を策するに、當を得た家であつた。この吞象樓は、今も榎井村字六條七八七番地に残り、香川縣指定の史蹟となつてゐる。

閑話休題——。

その夕。

燕石は、女房のお松に酌させながら、例の二階の居間で、杯中に象山の姿をうかべてそれを傾

け、  
「のう、お松」

機嫌のいい聲で呼んだ。

お松は、もと「津屋のお松」といつて嬌名高く、燕石の勤王事業に、内助の功多き女性である  
「君田はどうしたらう。けふは一日、姿を見せなんだやうだが……」

「ほんに、美馬さんは——」

と、お松は頷いた。

燕石のあるところ必ず美馬君田あり、といはれるほど、一心同腹の兄弟ほどに親しい君田のこ  
とを、お松も思ひ出したのである。

「さういへば、お越しがなかつたやうですが……」

「あの男が居らぬと酒が美味くない。といつて君田は、酒のたしなめぬ男だ。のう、お松。わし  
自身、不思議でならないのは、君田のことよ。わしと君田は、離れ難い宿命にあるらしい」

「本當ですね」

お松は、皓い齒をみせて笑つた。

「いつだつたか、奈良松莊先生が、こんなことを仰有つておりました。君田は隱逸の花、菊と譬へ  
るなら、燕石はまづ泥中の蓮か。その二人が並んでゐて、ちつとも可笑しく見えないのは、二人  
が互ひに、おのれの足りぬところを補つてゐるからだらう、つて」  
「わしが蓮で、君田が菊か。あはははは」  
聲を立て、笑つたが、すぐに眞顔になつて、  
「なるほど、さういはれてみると、思ひ當る節がある。さすがは、奈良先生だの」  
と、感じ入つた眼になる燕石だつた。  
遠く金毘羅門前町あたりから、弦歌のさびめきが聞えて来るし、階下でも大勢の乾分たちが、  
手なぐさみに興じてゐるらしく、物騒がしく響いて来る中に、この居間だけは静かだつた。  
誰か二階へあがつて來たらしく、足音が近づいたかと思ふと、スルリと、その襖が開いた。  
「おや……」

顔を出した男を見て、燕石もお松も、一緒にいつた。

「君田ぢやないか」

「ま、美馬さん……」

今もいま、二人の噂にのぼつてゐた美馬君田であつた。

君田は、阿波國美馬郡重清村宇谷口の生れで、嘗て郡里村願勝寺の僧であつたが、嘉永六年六月、讃岐に來て以來は、すつと燕石の陰にあつて、あるひはその智囊となり、また股肱となつて王事に盡瘁してゐた人である。

燕石は、市井巷間より奮起した尊王の士であり、君田は、禪定門下より蹶起した憂國の人である。君田に清節高士の風があれば、燕石には、清濁併せ呑む俠骨があつた。その二人が、固く結ばれてゐるのである。

君田は安政六年のある日、燕石から蓄髪を勧められ、以來頭髮を伸ばしてゐたが、この頃は、まだ延び切らぬ髪を、總髪みたいにしるへ垂らしてゐた。

君田は、燕石夫妻の言葉を異様に感じて、

「何かあつたのですか？ わたしの來たことを、非常に珍らしがつて居られるやうだが……」

「いや」

燕石は、微笑をふくんだ。

「けふは貴公の姿を見かけぬから、今もお松と、どうしたらうかと噂をしてゐたところだ。そこ

へ貴公が姿を見せたものだから……。のう、お松。會ひたくば謗れ、ちやの」

「ほほほ、謗つてゐたわけぢやありません——。さ、美馬さん、どうぞこちらへ」

「有難たう」

會釋した君田は、うしろを振向いて、

「君もはいるがい」

といつた。

彼とともに、誰か來てゐるらしい。

「君田、お客か？」

燕石が問ふと、君田は、座に就きながら、

「うむ。丸龜の越後屋の御子息が……」

「なに、宗四郎さん？」

なるほど、君田についでにはいつて來たのは、村岡箒子の息、宗四郎であつた。まだ十七歳の紅顔ながら、さすがに勤王女傑の箒子の薫陶よろしく、天晴れの美丈夫である。

「おオ、宗四郎さん。これは珍らしいお客だ。さ、すつとお進みなさい」

來客好きの燕石は、この若者を欣んで迎へした。

「しばらく御無沙汰してゐるが、お母さまは御健在かな。お歸りになつたら、燕石がよろしく申してゐたと傳へて下さい」

「はい、有難うございます。母こそ、御無沙汰のお詫びを、くれぐれも申上げよといつて居りました」

「これは痛み入る」

燕石は、軽く頭を下げた。

横から君田が、

「宗四郎さんが今夜來られたのは、母御の御内意をうけられてのことぢやさうな」

「ほ、ホウ」

「わしは、今この先で、偶然宗四郎さんに會つたのだが、筆子さんからの傳言は、例の大和義舉が近づいたと……」

「な、なに？」

ハツとしたやうに、燕石は、聲をつゝぬかせた。そして、眼の前の酒器や膳部を横へ押しやり

居ずまゐを改めてから、

「宗四郎さん」

打つて變つた嚴肅な聲である。

「——はい」

「いま、君田のいつたことは、本當ですか？」

「はい。本當です」

「うけたまはりませう。そのお話の内容を」

「申上げます」

若者らしい感激を、その聲にも、面にも漲らせながら、さきの日、大和から林豹吉郎と乾十郎が潜行して來たこと、中川忠光卿を首領とする天誅組の旗擧げが近づいたこと、天誅組は皇軍御先鋒をうけたまはること、などなど、宗四郎は、逐一物語つた。

默然として、身動きもせず聞いてゐた燕石は、宗四郎が語り終つたのを見て、

「時節到來……」

低く、呻くやうに洩らした。

一旦は眼を閉ぢ、何事か沈思する様子であつたが、やがて、くわツと瞳くと、  
「君田！」

火のやうな聲であつた。

打てば響くやうに、君田は、

「おウ！」

「時節は來たのぢや。待望の時がまゐつたのぢや。博徒の親分と陰口される加島屋長次郎が、日ごろ養つてゐた乾分たちを引き連れ、倒幕の仲間入りが出来る時が來たのぢや。わしは、この日をどれだけ待つたらうか——。君田、貴公には、わしの心持がわかつてくれよう」

「わかるとも。うむ、わかるとも！」

「もとより、徳川三百年の覇業を、この一戦によつて覆せようとは思はん。が、天誅組舉兵のことが傳はり、皇軍の御先鋒を相つとめたと聞えたなら、諸國の志士は一齊に駭起するであらう。尊い仕事ぢや。尊い棄石だ。わしは、喜んでその棄石の一つとなり、この五體を天朝に捧げるのだ」

「……………」

「思ひ出すよ。遠く元弘の昔のことを」

燕石の言葉は、いよ／＼嚴肅だつた。

「元弘の昔、楠木正成公には千早の孤城に據り、天下の大軍を引受けられた時、申すも畏き儀であるが、後醍醐天皇には祕かに隱岐をお出ましになり、名和長年公に命じ給ふて、船上山に錦の御旗を翻させ給ふた。それと傳へ聞いた諸國の義軍は、一齊に鋒起したのぢや。播磨に赤松、四國に河野、九州に菊池、更に東國に新田と……。遂に、北條の天下は覆り建武の中興は成つたのであつた」

「……………」

「元弘の昔を今にして、主上大和行幸に呼應する天誅組の旗擧こそ、まさに船上山の擧兵と機を一にするものぢや。その旗擧げに参加を許されるこの身の有難さ、勿體なさ。君田、わしの五體が顫えてならぬ！ わしの心魂は泣けて来る！」

四十七歳の今日まで、燕石が斯くまでに昂奮したことはあるまいと思へるほど、彼の一語一句には、烈々火のやうな激しさがあつた。聲に顫えを帯び、泣いてゐるのか、臉を眞赤に染めてゐた。

君田もお松も、宗四郎も、何か尊いものをそこに見たやうに、肅然として、燕石の言葉に耳を傾け、その姿を仰いだ。

気がついたやうに、燕石は、

「お松……」

と、しづかに呼んだ。

あわてゝ、ソツと涙を拭つたお松は、

「——はッ」

「階下へ行つて、京太郎を呼んで来てくれ。彼は、確か離座敷で勉強してゐる筈だ」

「はッ、すぐに」

お松は、階下へ降りて行つた。

「君田」

と、見返つて、

「すまんが、料紙と硯を……」

「心得た」

君田が、居間の隅にある料紙と硯を運ぶと、燕石は、何事かサラ／＼と書きつけた。

そこへ、お松に伴はれてはいつて来たのは、燕石の詩の弟子である三好京太郎だつた。

彼は、宗四郎と同年輩の弱冠だが、さすがに燕石の側近にあつてその教へをうけてゐるだけに身心ともに強健な若者である。

「京太郎」

筆を措いて、それを一封に封じると、

「お前は、今から旅支度して、今夜のうちに出發しろ。行先か？ 大和だ」

「はい。大和へ——」

「かねて申聞かせてある通り、大和の義舉の日が近い。わしは、かつて本間精一郎どのに讃州健兒三百を率ゐて参加することを約束した。いま、その日が近づいたから、お前を連絡のため大和へやるのだ。この一書を、松本奎堂どのに届けてくれ」

「先生ッ」

京太郎は、若い情熱をみなぎらせて燕石を仰いだ。

博徒の親分加島屋長次郎を「先生」と呼ぶのは不自然だが、勤王詩人日柳燕石を呼ぶのに、そ



れは不自然でなかつた。

「行つてまゐります。先生、すぐに出發いたします」

「うむ。丸龜を明日の一番船に乗るがよい。京太郎——、餞別だ」

「はッ、頂戴いたします」

燕石の差出す盃を、京太郎が受取ると、お松が、酌をしてやつた。

京太郎は、グツと呑み乾した。

「京太郎」

傍らから、君田が、

「大切な首途だ。ひとつ、お得意の劍舞をやつてゆかんか」

「美馬先生——」

京太郎は、はぢらふやうな笑ひをふくんだ。

燕石は、首肯いて、

「なるほど。これアいゝ趣向だ——。京太郎、勇壯にやれ。わしが吟じてやるぞ」

「はい。先生」

京太郎に、否むところはなかつた。すぐに起つて、身支度した。

燕石は、正座すると、朗々と吟じ初めた。

どちらかといふと、燕石は、瘦身短軀、あまり風采の上らぬ軀つきだが、その五體からどうしてこんな聲が出るかと疑はれるほど、音吐堂々、張りのある佳い聲だつた。

綿々たる垂統帝王の家

萬世金甌瑕を受けず……。

開口一番、吟ずるは皇國の本體である。

キラリ、行燈の灯に映へて閃めくのは、今宵の使者を生涯の光榮として、若い魂を揺ぶり揺ぶり、晴れと舞ふ京太郎の白双の色であつた。

燕石は、つゞけた。

嶽は三州に跨る白菌菴

湖は八景を開く綠琵琶

鯛魚は海内無雙の味

櫻樹は人間第一の花

此神邦を護るは是れ何物か  
寶刀七尺霜華凜たり

此神邦を護るは是れ何物か、寶刀七尺霜華凜たり——舌端火を吐くが如く、いま燕石が吟ずるこの一節は、まさに皇軍御先鋒たる天誅組の首途を飾るに、ふさはしい言葉と思はれた。

いや／＼、いや、これこそは、飲博風雅の假面により、雌伏し韜晦してゐた日柳燕石が、ここぞ赤裸々となつて南海の一角から起ち上り、十年練磨の日本刀を抜くべき時であると、燕石自身が自祝してゐるのでないかと、君田もお松も宗四郎も、京太郎も、ひそかに彼の心をさう領いた。主客の心が渾然一つとなつて、酔つたやうに、この雰圍氣に耽つてゐる時。

「親分ツ。——親分！」

あわたゞしい聲だつた。

興は、一瞬にして破れた。

「——親分ツ」

と、息をはづませ、そこへ顔を出したのは、加島屋一家の兄哥株、關門の安である。

燕石は、ギョロリとした眼を向けた。

もう勤王志士日柳燕石ではない。その言葉も、態度も、市井の俠客、加島屋の長次郎親分だつた。

「どうしたツてんだ？ 安」

「へい、親分。折角のところ、お騒がせしてすみません」

安にも、一座の空氣がどんなものか判つたか、ペコリと頭を下げて、

「實は、政の野郎が金毘羅大芝居を見物に行き、蘇鐵山の身内に傷を負はされて歸つて來たんですが……」

「政が、蘇鐵山の身内に？」

「さうなんです。前田屋の戸板に乗せられて、たつた今、搦ぎ込まれました」

「——ふウむ」

「親分。加島屋一家は、親分のお指圖に従つて手出しをしねえもんだから、蘇鐵山の奴ら、ノサばつてやアがるんです。いつかは一度、結着をつけねえことには、加島屋の名が廢ります」

「……」

「親分。若い奴らは、もう我慢がならねえ、今夜のうちに蘇鐵山へ斬り込むんだと、息巻いて居

りますが……」

「……………」

「親分。みんなは身支度して居ります。身内を集めにやならねえと、騒ぎ立て、居りますが……」

「……………」

「——親分」

「安ッ」

グンと、腹へ泌み透る聲だつた。

「へ、へい」

「おれが指圖するまで、若い奴らを抑へるんだ。いゝか」

「——へい」

「ともあれ、非常の太鼓を打て。身内に觸れをしる。今夜のうちに、裏の興泉寺境内へ勢揃ひしろ、と」

「えッ」

安だけでなかつた。君田もお松も、宗四郎も京太郎も、眼を丸くした。

誰もが、安の報告を聞いた燕石は、乾分たちの妄動を抑へ、大事の前の小事であるとばかり、隠忍するものと思つてゐた。

が、燕石の言葉は意外だつた。

「非常の太鼓を打て」

といふ。

「身内に觸れして、今夜のうちに、裏の興泉寺境内に勢揃ひさせろ」——と命じたのだ。

あきらかに燕石も、乾分たちの心を諒として、蘇鐵山光藏一家と喧嘩をやるらしい。

他の者は知らず。單純に事を好む關門の安は、雀躍して欣んだ。

「承知しました。親分、早速に手配いたします」

轉がるやうに、階下へ降りて行く安のうしろから、

「安。興泉寺境内へ、篝火を焚くことを忘れるなよ」

と、燕石がいつた。

「へい。合點でござんす」

遠くで答へる安の聲は、張り切つてゐる。

燕石は、緊張した顔つきになつてゐる君田らを見返つて、

「とんだ人騒がせだよ」

と、苦笑ひみたいなものを含んでみせた。

「先生ッ」

呼んだのは、京太郎だつた。

「先生。わたくしは……」

「いゝんだ。お前はやつぱり、今夜のうちに出發しろ」

「ですが……」

「喧嘩になつたところで、榎井と金毘羅ちや小さなものだ。お前は大和へ行つて、幕府を相手の大喧嘩をやるんぢやないか。あとに心を残さず、今夜のうちに發つがいゝ」

「はゝ……」

「おツ、さうだ——。宗四郎さん。丸龜までは、京太郎が道連れになります。道中氣をつけて、歸つたなら、お母さまによろしく傳へて下さいよ。燕石はやつぱり、ばくち打ち根性が抜けねえ

なんて、陰口を吐いちやいけませんぜ。あはゝはは」

豪氣に笑つてから、ぬつくと起ち上つた。

「お松、刀をくれ」

「——はゝ」

お松が差出した朱鞘の長い刀は、安政四年二月、漸くにして求め得た自慢の愛刀である。

それを掴んで、

「君田、行つてみないかね」

まるで芝居見物に行くほどの、氣軽さであつた。

四

——話は、かうである。

大和義舉 當時、琴平には南海一といはれた常設の劇場があり、これを「金毘羅大芝居」と呼んでゐたが大阪の千兩役者の芝居が田舎で觀られるのは、まづこゝだけだつた。それだけに、四國はもとより、中國あたりからも見物人が参果して、さらぬだに参詣人で賑ふ金毘羅の町は、芝居見物の客

を加へて、凄<sup>まじ</sup>いばかりの繁<sup>はん</sup>昌<sup>しょう</sup>振<sup>り</sup>を見せてゐた。

その「金毘羅大芝居」小屋で、喧嘩<sup>けんか</sup>があつた。

この日、加島屋身内の岡田屋の政吉は、この芝居を見物に出かけたのだが、彼が購<sup>か</sup>めた座席の隣<sup>となり</sup>に來てゐたのが、日頃反目し勝<sup>か</sup>ちの蘇鐵山身内であつた。

顔を見ただけでも虫酸<sup>むしさん</sup>の走る敵同志<sup>かたまたま</sup>。どちらが絡<sup>か</sup>んだといふでもなく、知らず識<sup>し</sup>らずのうちに口喧嘩<sup>くけんか</sup>の花が咲き、遂<sup>つい</sup>には、それが腕力沙汰<sup>わんりくさた</sup>となつた。

が、政吉はひとり、相手は四五人の多勢である上に、土地が蘇鐵山の繩張<sup>なはば</sup>りの金毘羅だから、誰彼れなしに政吉ひとりを敵<sup>かた</sup>にして、さん／＼に打擲<sup>うちなげ</sup>された末が、政吉は、木戸の外へ放り出された。

そのため、芝居は、一時めちやく／＼だつた。

しかも、木戸を放り出された政吉は、どう傷を負はされたものか、血をにじましてウンウン呻<sup>うな</sup>つてゐる。一人では起てない様子なのだ。

芝居者が見ると、政吉は、俗に「天領者<sup>てんりやうもの</sup>」と呼ばれてゐる榎井村の人間だし、その上、南海に俠名高い加島屋長次郎の身内であるとわかつたから、

「これアいかん。この儘捨て、置いては、あとでどんな祟<sup>まじ</sup>りがあることか」

と、蒼<sup>あざ</sup>くなつた。

すぐに置屋の前田屋へ搦<sup>な</sup>ぎ込み、應急手當をした後、戸板に乗せて恐る／＼榎井へ送り届けたのだつた。

(このまゝに済<sup>す</sup>むまい！)

といふのは、當の蘇鐵山一家ばかりでなく、この騒ぎを知る金毘羅領の誰彼れが、ソツと囁<sup>ささ</sup>き合つたところである。

果して――。

災<sup>わざ</sup>ひは、その夜のうちに起つたのだ。

榎井と金毘羅とは、ちよつとした松並木を境にした隣同志<sup>となりまたま</sup>だから、何かあれば、すぐにわかる殊<sup>こと</sup>には夜。

突如として、榎井村の夜氣をふるはし、曇<sup>曇</sup>々と鳴る非常太鼓の音が、金毘羅の町に聞えた。

「おやッッ！」

と、耳を澄<sup>す</sup>ますまでもない。

その太鼓の音にまちつて、法螺貝が吹き鳴らされてゐる。

ゴオン、ゴオン、

あわたゞしく撞いてゐるのは、興泉寺の早鐘ではないのか。

「何事か？」

「ど、どうしたといふんだ？」

事情を知らぬ者は、異様な眼になつた。

事情を知る者は、

「さア大變！」

と、色を失つた。

「天領者が斬り込んで来るぞ！」

「芝居小屋の喧嘩の、仕返しに来るんだ」

「加島屋の親分は、火のやうに憤つたさうな」

「金毘羅の町を灰にするまでは許さねえと、ひどく腹を立てゝゐるといふぜ」

「あの鐘や太鼓は、加島屋が身内を集めてゐるのだ」

「身内だけぢやない。榎井村の者は、一つになつて寄せるといふ話だ」

「傍杖を食つちやならない。今の内に、町を逃げ出さねば……」

嘘も眞實も取りまぜて、人々は騒いだ。

事實、金毘羅者の出入りを阻んで見張りに立つ加島屋一家の警戒線を突破し、ソツと榎井村の様子を探つて来た者が、

「興泉寺境内にアカ／＼と篝火が焚かれ、加島屋身内が、續々と集つてゐる。それもみんな物々しい喧嘩支度で……」

と報じたから、町の者たちは、

「どうなることか」

と、膽を潰した。

社領金毘羅に於ても、この情報を重大視した。

「萬一に備へて、固めを嚴重にせよ」

と、金光院から命令が出たから、家中二百三十人の侍をはじめ、蘇鐵山光藏、備後屋九平の身内や、町家から徴發した者をもつて町内の警備に當て、大門前へは三十挺の鐵砲を備へた。また

参道の一の坂には、敵をすべらす秘策の竹の皮を敷きつめ、大八車を備へて坂の上から一度に突き轉がさうといふので、その準備を急いだし、高松、丸龜の兩藩へも、早馬をもつて援を乞ふた。即夜、高松藩からは、吟味役福家清太郎がこれまた早馬で出役し、金光院虎の間に於て、重役菅納孝左衛門らと應接、擬議の結果、援は高松藩のみに請ふことに決して、丸龜藩に對しては、前請を取り消すこととなつた。そこで、豊島四郎右衛門が使者として丸龜へ急行したが、その時すでに丸龜藩兵は、郡家（櫛梨ともいふ）まで出陣してゐたのである。折衝の末、漸く退陣を乞ひ得たが、丸龜藩では暴徒を縛する捕繩を、長持に三箱ギツシリと詰めてゐたといふ。

「とにかく、町には火がついたやうな騒ぎで、一時はどうなることかと、みんな生きた心地もありませんでした」

とは、土地の古老が、今も語り傳へてゐるところである。

——一方。

榎井村では、どうしてゐたか？ ——といふと。

非常太鼓の音に、吹き鳴らされる法螺貝、それに加へて、ゴォーン、ゴォーン、

と、あわただしく撞き鳴らす早鐘にあふられるやうに、こゝもまた、大變な騒ぎであつた。しかも、金毘羅に於ける物々しい備へが傳はつて、

「金毘羅から襲撃があるらしい」

といふ流言に、村民たちを怯えさせた。

「そりやいかん。こちらも手配を急がねば……」

「さうぢや。五挺立の早船を仕立て、倉敷のお代官所へ、すぐに御出役をねがはうぢやないか」  
村の總代たちは、額を鳩め、そんなことを相談し合つた。

そこへ、燕石の加島屋長次郎から使ひが來て、

「お騒がせいたして相済みません。が、決して村の皆さんへは御迷惑はかけませんから、いま暫く、お静かにこの儘お見遣し下さいませう……。のちほど、長次郎自身が御挨拶にまゐります」といふ、鄭重な挨拶があつた。

村民たちは、いくらかホツとしたものの、なほ心中の不安は、どう否むべくもなかつた。けれど、

「ま、加島屋さんがそれまでにいはれるならば……」

日頃の燕石の徳に、一縷の望みを託したのである。  
その燕石は？

興泉寺境内にあつて、身内の參集を待つてゐた。

篝火はアカ／＼と焚かれ、まるで天を焦さんばかりである。パチ／＼と火の粉がとんで、あたりは、眞晝ほどの明るさであつた。

その灯の色に半顔を染めながら、燕石は、どつかと床几に腰を抵えてゐた。例の朱鞘を抱くやうにして、一文字に唇をむすび、身動きもしないその姿には、觸るれば斬れんばかりの貫祿が見える。

「遅くなりました」

「たゞ今まゐりました」

乾分たちは、續々と集つて来て、兄哥の佐市駒に參着のことを届け、遠くから燕石に目禮する。いづれも、甲斐々々しい喧嘩支度である。誰もが拔身の刀を携けてゐるか、さうでなければ、まだ青色も生々しい竹槍を小脇にかい込んでゐた。

「日頃の鬱憤を、今夜こそ晴らすんだ。蘇鐵山にしる備後屋にしる、随分とノサばりやアがつた

からな」

「さうだ。どいつ此奴の容赦はしねえんだ。見てゐろ、今に眼にも見せてやるから……」

「加島屋一家が起ち上りや、かうも怖ねえといふことを、今夜こそ知らせてやる」

乾分たちは、互ひに氣勢を昂げるのである。

早くも、凄惨の氣が、境内いつばいに擴つた様子であつた。

やがてして。

「――親分」

佐市駒が、燕石の前へすゝんだ。

「加島屋一家。親分のお召しに従ひまして、三百四十七人、こゝに集りましてございます。まだ來ねばならねえ奴が残つて居りますが、何か事情があるんでせう。今夜のところは、遅參してゐます」

「三百四十七人？——うむ、さうか」

おうむ返しにして、燕石は、満足さうな首肯きを見せた。

佐市駒は、言葉をついで、



「親分。早速と練り出させうか？」

「いや、待て」

「え？」

「みんなに話してえことがある。暫く静かにするやうに、さう傳へてくれ」

「へえ」

佐市駒は、そのことを乾分たちに傳へた。

何事か？ 親分の口から、どんな言葉が洩れるか？ ——と、乾分たちは、ピタリと私語をや

め、静肅にそこへ居並んだ。

燕石は、傍らに黙然と立つてゐる美馬君田の、無表情な面をチラと見返つて、やをら、床几から身を起した。

「おい、みんな」

よく通る齒切れのいゝ聲で、さう呼びかけた。

「今夜は日頃の加島屋らしくもねえ。法螺貝を吹いたり、早鐘を撞いたり、常にないあわたし

い寄せ方をしたが、みんな、よく来てくれた。こゝに集つた三百四十七人は、おれの命なら否や

なく、命を捨てゝくれるんだらう。長次郎は、厚く禮をいふぜ」

「……………」

シンミリとした燕石の言葉に、一同は、戸迷つたやうに、あわてゝ一禮した。

燕石は、微笑をふくんで、

「ところで、みんなの支度が、おれには氣に入らねえ、おい、みんな、刀は鞘に納めるがい。」

竹槍は捨てる。繩襪は解くんだ。鉢巻もやめろ」

意外な燕石の命令だから、乾分たちは、さわめいた。

關門の安が、

「親分。それは……………」

と、一步踏み出さうとするのを、

「黙つて、おれのいふ通りにするがい。」

低いが、鋭くさう抑へた。

「——へえ」

言葉の意味は知れぬながら、乾分たちは燕石の言葉に従つた。拔身の刀を携げてゐる者は、そ

れを鞘に納めた。竹槍を捨て、細褌も、鉢巻も解いた。

それを見て、燕石は、

「さて——」

と、つゞけた。

「今夜のことについて、お前たちは、蘇鐵山と喧嘩をやると勘違ひしてゐるらしい。いや、おれもまた、そんな風な氣ふりを見せ、お前たちを集めたんだ。が、蘇鐵山との喧嘩など、毛頭おれの心にはねえ」

「……………」

またしても、乾分たちの間に、ざわめきが起つた。

それを抑へる燕石の聲が、すぐにかう續いたのである。

「實のところ、非常の觸れを出したなら、お前たちがどれほど集つてくれるか、それがおれには知りたかつたんだ。親分といひ乾分と呼び、固めの盃をした中で、こんなことをするなア水臭いといふかも知れねえ。なるほど、もつともだ。お前たちの心のわからねえおれぢやないが、今度といふ今度こそ、お前たちの命を、この加島屋が貰はねばならねえことになつた。それも、單な

る喧嘩ぢやねえ。時と場合によつちや、死よりも辛い働きとなるだらう」

「……………」

「死ぬことは易い。が、死の境地を踏み越え踏み越え、生きて生きて生き抜いて、生限り根限り働くつてことは、なか／＼出来ねえ行だ。それをお前ちに、やつてもらはにやならねえ。それ故、こんな寄せ方をして、お前たちの覺悟のほどを知らうとしたんだ。ゆめ、お前たちの性根を疑つたんぢやねえんだぜ」

「……………」

誰にも判るやうに、さう嚙みくだいて説く燕石の言葉に、一同は、シーンとなつた。

「——親分」

呼びかけたのは、關門の安だつた。

「ぢや、やつぱり相手は、蘇鐵山や備後屋ぢやなかつたんでござんすね」

「うむ。さうだ」

「さうでしたか。常日頃の親分のお言葉から考へて、どうも話がうますぎると思つた。道理でね。あつしは、夢を見てゐるやうだ」

傾狂にさういつたので、乾分たちはもとより、燕石も、うしろにゐる美馬君田も、思はず笑ひを誘はれた。

燕石は、また嚴肅な口調になつて、

「安がいつたやうに、おれたちの相手は、蘇鐵山や備前屋ぢやねえ。相手は、徳川幕府だ。幕府のお偉方だ。國の行末を考へず、自分の利益のためにウヨ／＼してゐる佐幕の諸藩だ。將軍あるを知つて、天朝さまに盡す道を知らねえ不忠の幕臣どもだ。いゝか。このことを、しつかと性根に刻んで置くんだぜ」

さういふ燕石の赧ら顔は、篝火に映えて、神々しく仰がれた。その一語一句は、がさつな乾分たちの胸を、強く打つた。

「へい。わかりました」

と、みんなは 一齊に首肯いた。

燕石は、ニツコリして、

「わかつたなら、このまゝ靜肅に引きとるがいゝ。いつもいふやうに、命を大切にし、行ひをつしんで、この次、非常の太鼓が鳴る日を待つんだ。いゝか——。おれア村の總代衆に會つて、

今夜のお詫びを申上げて来る」

ノツシと歩を運ぶ燕石の姿には、何かしら溢れるものが見られるやうであつた。かうして——。

この夜の騒ぎは、呆氣なく幕となつたのだつた。

加島屋一家の來襲を期してゐた金毘羅領の者たちには、何が何だかわからない。

「こちらの備へに、恐れをなしたのだらう」

「加島屋ともいはれる男が、案外しつ腰もねえ」

燕石の胸中を知らず、そんなことを噂し合つて、今もこの騒ぎを「榎井騒動」と名付けてゐるその夜の燕石の行動は、まったく、乾分の嚮背を知らうためであつた。本間精一郎に約束した「讃州健兒三百」の實證を見ようとし、三好京太郎を密使とした「天誅組参加」の準備であつたかうして、加島屋一家は天誅組の舉兵と 京太郎からの連絡を待ち設けた。

だが——だが。

天誅組は舉兵したけれど、京都に於ける八月十八日の政變ゆえに、その雄圖も空しく、皇軍御先鋒のことは破れ、天誅組は潰滅したのだつた。

次に、その顛末を語らう。

五

天誅組三千の壯士から、その主將と仰がれた中山忠光は、大納言中山忠能卿の第三子で、天資英邁にして常に皇運の式微を悲しみ、早くから諸國の志士とともに國事を密議してゐた。

文久三年八月、彼が松本奎堂、吉村寅太郎等とともに、名を「天誅組」と唱へ、義舉を大和に起したのこそ、實に全國勤王黨の最初の旗擧げであつた。

忠光が同志數十人とともに、大阪から早船二艘をもつて堺浦に着いたのは、八月十五日であるとして、狭山、丹南、白木などの諸侯を遊歴して軍資を借り集め、十七日には、甲田村を経て觀心寺に到り、楠木左中將正成の首塚を拜した。その頃はもう、黨員の數も三千の多きにのぼり、なか／＼侮り難い勢力となつてゐた。

一同は、正成の首塚の前に於て、尊王圖幕の完成を祈願し、天誅組義舉のことを固く誓つた。この時、忠光が墓前に讀みあげた誓文は、一次のやうな意味のものであつた。

勤王の權化、忠勇武烈の聖雄、楠木聞兵衛正成朝臣の御首塚に、中山大納言忠能が一子前侍

從中山忠光を始め、備前の藤本鐵石、松本謙三郎等三州人、吉村寅太郎等土佐人、其他諸國諸藩同志の面々、更に水郡善之祐父子を首班とする河内勢等勤王正義の士、ひれ伏し、一天の君への盡忠を此處に誓ひ奉る、方今の御時勢、内は綱紀弛み、上下一致を缺き、外には驕慢なる五大洲の侮辱を受け、その侵略併合の禍にかゝらんとす。

大君深く叡慮を憐し給ひ、去る八月十三日攘夷御祈願之爲、大和行幸を仰せ出さる、乃ち春日山に逗留、更に樞原神武帝陵、伊勢神宮に參拜、攘夷御親征の祈願遊ばされ、もつて聖地大和より天下諸大名に御親政の大號令を發し給ひ、大阪に關門十ヶ所を設け、又は攝津の海防警備をととのへ、外敵に當らんとし給ふ、

此處に於て、御親兵を募られ、兵馬の權、土地人民の權を朝廷に歸せられ、更に鳳輦を箱根に迄進め給ひ、叡慮を曲げ勅を奉ぜざる不遜の逆徒徳川幕府倒滅を斷行されんとす、我等草莽に潜伏の輩、微力微賤といへども、五體に逆流する熱血の忠誠もて鳳輦を大和に迎へ奉らんとし、此の處に於て義兵の旗を擧げんとす、

それ正成公は元弘三年千早城に據つて、百萬の朝敵幕軍を惱し敗り、もつて天下潜伏の勤王

の烈士に呼びかけ給ふ、仍て上野の新田義貞、伯耆の名和長年、中國の赤松、四國の土居等吉野に居りませる大塔宮護良親王の令旨によつて、奮然大勤王軍に投じ、斯くて鎌倉幕府の倒壊成る、されど不幸、逆臣足利尊氏の反により、惜しや、

神武天皇以來の御親政の大御代に還る建武中興、後醍醐天皇の御偉業も挫折し終りたり、今上陛下、今や父祖の大御心を御完成あらせられんとし、大和行幸を期し攘夷御親征を以て御實行の第一歩を進め給ふ、その御先鋒たらんとする我等は、大忠臣正成公の墓前に、一死以て盡忠報國の誠を誓ひ奉り、楠氏一族の忠魂、我皇軍を先達し守護し給はらん事、歴代勤王の忠臣が幽魂の餘光と合せもつて、只管祈り奉るもの也、

文久三年八月十五日

前侍徒中山忠光恐惶謹言。

斯くて、天誅組は「一死報國」の旗を擧げたのである。

その日、一同は肅々として五條に向けて進發し、まづ軍門の血祭として五條代官鈴木源内を殺害、その首級を梟し、

——これ徳川三百年の徳を知りて、未だ朝廷三千年の恩あるを知らず、重賦厚斂、毎々に幕府のために 天皇の赤子を虐ぐ、大逆亡道、故に天誅を加へ、以て國家の蠹害を除く。

といふ斬奸の主意を掲げた上、その館に火を放つて焼き拂ひ、櫻井寺に引き揚げて立て籠つたそして、その門前に大きな貼札をして、

——皇祖國を開き皇孫世を御す、惟れ天下の主たり、即ち惟れ天下の臣たり、汝庶民宜しく大義を辨へ、以て心を一にし、朝廷に事ふべし、因て今年田租の半を除す、

と布告したのでつた。

これより先——。

わが國論は「攘夷」と決定して、文久三年三月、入京した將軍家茂は、朝廷より攘夷の節刀を賜り、また 孝明天皇に於かせられては、畏れ多くも京都の石清水八幡宮に行幸あそばされ、攘夷の遂行を御祈願あそばされた。

が、この攘夷決行の直前、世にいふ「生麥事件」が起つて、英人側が頗る強硬な態度で問責しその賠償を幕府に迫つたから、さらぬだに弱腰の幕府は色を失ひ、英人と薩藩との板挟みとなり攘夷遂行どころではなかつた。結局は、洋銀四十五萬元を出すことにして、英人側に詫びを入れるといふ不熊な醜態を演じた。

この事件は、天下の志士の血を、いよく湧き立たせたことはいふまでもない。

殊に、徹底的な辱王攘夷を標榜し、その急先鋒を以て任じて、長門の要害にことごとく砲臺を築いて準備を整へてゐた長州藩は、齒齧みし、

（攘夷は、斯くするものぞ！）

とばかり、馬關を通過する米船に向ひ、俄然攘夷の巨砲を放つた。そして、米、蘭、佛の軍艦を引き受け、前後數回に亘つて砲火を交へた。

一方、長州に於けるこの攘夷決行に呼應し、三條實美をはじめ、東久世通禧、壬生基修ら急進派の公卿たちが、攘夷の御親征を仰ぎ奉ることとなつた。

即ち、大和の神武天皇御陵と伊勢の皇大神宮に、攘夷の御祈願をお樹てになるといふのが表面で、實のところ、錦の御旗を關東にすすめ、軟弱な幕府を倒さうといふのである。

文久三年八月十三日勅して、まさに大和に行幸せられんとしたが、その寸前、この秘密計劃は保守黨の耳にはいつたのだつた。

大和の畝傍山行幸のことを知つた薩藩の奈良原、高崎の兩士は、會津藩の廣澤富次郎、秋月悌次郎らにこの大事を告げ、熟議を凝した末、緒に中川宮、近衛、二條の諸殿へ伺候して申上げたから、宮は十五日に參内あそばされ、このたびの親征の客易ならぬことを奏上あらせられた。ま

た、松平慶永らも、親征の不可であることを説き、諸侯も多くはこれに同意し、殊に薩藩の島津久光は、かねて長藩を心憎く思つてゐたから、

——長藩、浪士を煽動して禁闕を擾がす。幕府は宜しくその罪を糺すべし。

と揚言したので、公卿も多くは親征が危険であることを憂ひ、茲にまつたく朝議は一變、同月十八日に勅して大和行幸はお取り止めとなり、尊融親王には俄に入朝あらせられ、松平容保、稻葉正邦らを召して、九門を鎖し、薩摩、會津、淀、因幡、備前等の兵をして、これを守備せしめられた。

三條實美らは入朝を禁じられ、それまで禁闕守護の任に當つてゐた長州藩は、京都を退くことを命じられたのである。

直ちに、各藩の兵は武装して、一齊に砲を列ねた。宮闕の下、今にも血の雨を降らさうといふ物々しい有様となつたから、上下の人心は恟々として、安き心もなかつた。

それと聞いた三條實美、長州藩士毛利元純らは驚いて、すぐに入朝しやうとしたが、諸門は鎖されてゐるからはいふことを許されない。のみならず、尊融親王は、實美の罪を責められて幽居を命じ、また、毛利元純にも、謹慎して命を待つべしと命じられたのであつた。元純が、百方辯

疎したけれど、もとより聞き入れられる筈はなかつた。

そこで元純は、三條實美、三條西季知、東久世通禧、四條隆調、壬生基修、錦小路頼徳、澤宣嘉の七卿を奉じ、ひそかに守備の眼を遁れて長州に脱走した。世にいふ、いはゆる七卿落がこれである。

朝廷に於かせられては、このことを聞き召されて大いにお怒りになり、直ちに七卿の官爵を削らせられ、また一切の長州人の入京を嚴禁せしめられた。

そして、在京の諸侯を召して、

——詔命の十八日以前に係はるものは皆 天皇の意に非ず、宜しく十八日以後をもつて眞勅となす、

と申渡された。

この八月十八日の政變によつて、天誅組の義舉もまた、單なる暴舉とみなされたばかりか、京都守護職松平容保は、和歌山、美濃、津、彦根の各藩および、大和、和泉の領主に、

(天誅組討つべし！)

と命令した。

「ああ、止んぬる哉！」

その報を傳へられた忠光らは、未だ時期の至らざるを知つて長嘆息した。

が、今となつては、是非がないのである。最早、身を容れるところはなくなつたわけである。

もとより、死は覺悟してゐる一同であるから、

(この上は決戦して、主義のために潔よく死するに如かず)

と、決議して、一旦、十津川に退くこととなつた。

そこで、二十日の夜に坂本に至り、翌二十一日、天之川の要害に本陣を置いて、こゝで更に、金穀を集め、兵を募つた。

この時、豪士野崎主計をはじめとする農兵千二百人が加はり、また高野の衆徒も助成したからまづ紀伊の將水野多門と戦つて、多門に重傷を負はせ、多數の兵を斃して幸先よき勝鬨を挙げた

二十五日には吉野川原に向ひ、平阪峠を越えて、二十六日の曉を衝き、高取城を攻め、津藩の將藤堂新七郎の率ゐる精銳と帯河口で戦つたが、この戦ひは天誅組に利あらず、松本奎堂、藤本鐵石は戦死し、吉村寅太郎は重傷を負ふて再び起つたはず、北の方なる遙かな皇居を伏し拜んで自刃したし、安武貞以下五十餘人は縛に就いた。

(斯くなれば是非なし。一時解散して再舉を計らん)

さう決した主將の忠光は、殘兵を率ゐて諸處を迂回し、同月二十七日大阪に着くと、薄暮を利  
用して茶船に乗り、長門國豊浦へ落ちたのだつた。

が、忠光の武運は飽まで拙なく、元治元年十一月十五日、遂に刺客の手に罹つて歿した。時に  
忠光は二十二歳。明治三年十月五日、特旨を以て正四位を贈られた。——それは後の話であるが  
皇軍御先鋒を以て任じた天誅組は、かうして潰滅したのであつた。

悲報は、直ちに讃岐へとんだ。

この報をもたらした三好京太郎は、激戦を物語る手傷も痛ましい姿で、悄然と榎井村に戻つて  
來た。

「先生ッ」

燕石の前に出ると、ハラ／＼と落涙する京太郎だつた。

「先生ッ。殘念でございました。朝議の一變によつて戦ひ利あらず、天誅組は、遂に……遂に……」

「うむ——うむ」

多くを聞くまでもなかつた。情報はすでに、燕石の耳に届いてゐたのである。

「御苦勞ぢやつたのう」

ポツリといつた。

「未だ時期至らず。是非もないことだ。是非もないことだ」

さう繰返した燕石は、彼として生涯たゞ一度と思へるほどの、世にも寂しい表情になつた。  
けれど——。

この天誅組の舉兵は、諸國の志士にとり、大きな刺戟となつた。

即ち、文久三年十月、平野國臣、南八郎らが澤宣嘉を推して將となし、但馬國生野に於て兵を  
舉げた。

つゞいて、元治元年三月、藤田小四郎が田丸直諒を主將に推戴して、水戸の筑波山に立て籠つ  
た。のち、武田耕雲齋がこの義舉に加盟し、天下の志士の血を湧かした。

いづれも、事成らずに敗れたが、「尊王倒幕」は最早、抑へ難い輿論となつたのだつた。

天誅組の舉兵は、無駄な捨石ではなかつた。

その時勢の動きに鋭い眼を放ちつゝ、燕石は、博徒の親分として、また雌伏しつゞけた。



旅の人の

一

——南國の春は早い。

二月の中旬だといふのに、もう桃も櫻も一度に咲く陽氣であつた。

が、春に逆いて、世間は、いよく物騒がしい。去年、といへば、いはゆる元治元年であるがその七月十九日、京都では禁門の變が起り、王城の地に血の雨が降つたといふ。

これは、文久三年八月の政變により、長州へ落ちた三條實美ら十卿の官爵復歸をねがふため、國司信濃、來島又兵衛、久坂玄瑞などが、長州の脱走兵を率ゐて大舉して京都へ押しよりのぼり、御所の近くで、會津、薩摩の軍勢と火蓋を切つた事件で、武運拙く長州軍は敗れて退いたが、このため、京都の大半は戦火に焼かれた。火は、二十二日に至つて鎮まつたが、御所の東は加茂川、西は堀川、南は七條の野の果までも一面の焼土と化し、俗に「京のドンドン焼け」と傳へられた。同じ七月に、信濃の先覺者として、早くから開港の止むなきを唱へてゐた象山佐久間象次郎が

惜しいかな、刺客に襲はれて暗殺されたといふ、物騒な噂が聞えた。

つゞいて八月には、英・佛・米・蘭の四國聯合の巨艦十八隻が、馬關砲撃の火蓋を切つたといふし、長州征伐の幕軍が、西下したなどといふ。

また、藤田小四郎、武田耕雲齋などが擧げた筑波の義軍は、十月になつて、やつと潰滅したと傳へる者があつた。

そんな騒がしい明け暮れに、元治元年を送り、慶應元年の春を迎へたのであるが——。とにもかくにも、世間の騒がしさに引きかへて、南國の春は、表面、平和に眺められるのだつた。

けふも、丸龜の船着場には、多くの客が降りた。

これは、同じ四國の宇和島から出た船で、八幡濱や長濱、高濱などに寄港し、道後の温泉で遊んでゐた客もだいたい乗せて來たといふ。

「旦那。——旦那さま」

頓狂に呼ぶ男があつた。

いまの船から降りた客だが、連れの男女がさつさと先へ行くので、かう大きな聲で呼びながら

あわて、後を追ふのである。

「旦那さま」

と呼ぶ男の顔色は、ドロシとにごつて赤かつた。

酒に酔つてゐるのだ。船中のつれづれ一杯ひつかけたものであらうが、すこし呂律の怪しい様子は、だいぶに飲んだものらしい。

連れは、クルリと振り向いた。

これも酔つてゐるのか、眼のふちに紅がのぼつてゐるけれど、言葉も態度も、しつかりしてゐた。

まだ若かつた。齡は、いまだ三十に届くまいと見られるし、どちらかといふと瘦せ形であるが見るとたんに、隙のない五體から強い壓迫を人に感じさせるやうな男であつた。武士なら、名ある劍客とも思へるであらうが、しかし、これは大人しやかな町人姿だつた。

「民藏」

と、後から追つて来る男へ浴びせる聲にも、何となし、剃刀ほどの鋭さを感じられる。民藏は、ギクリとした。

「——くす」

「ちつと静かにして歩かないか。お前の酒癖の悪さは、いつまでも直らぬらしい」  
「……………」

民藏は、とたんにしよげてゐる。

男は、仕方がないといふやうな薄笑ひをふくんで、連れの女を見た。

「おうの、行かう」

「はす」

「民藏、來す」

「——くす」

三人は、丸龜の城下を横に見て、三里の道を金毘羅指して踏み出した。

おうのは、美しい女であつた。齡も、二十一か二か。かうして見ると、町家の奥でしとやかに家政の切り盛りをする御寮人さまに違ひないが、どこやら、素人女になり切れぬ仇つぽいところがある。といへば、早くから色戀の里にあり、その嬌名を唱はれた女ではなからうか？ さう思つてみるせい、その足首をしめる草履の紅紐の色までが、ひとしほ艶やかに見られるのだつた。

三人は、しばらく黙つて歩いた。

埃りつぽい街道に、旅人の影も途切れたのを見て、

「おうの。疲れたろう。暫く憩んで行かうか？」

男が、いたはるやうに女を見返つた。

おうのは、熱つぽい眼をあげて、

「いえ。あたしは、まだ歩けます」

「まあいゝだらう。急がぬ旅だから、無理をすることは無い。しばらく憩んで行かう」

さういふと、自分から先に立つて、街道を横に外れた。

そこに、こんもりとした松林があつた。その緑のかけに一本、桃の花が、いまを盛りと派手な色を見せてゐた。

三人は、その日かげに座をつくつた。

「なあ、民藏」

男は、ポツリと呼びかけた。

丸龜を出て、まだ間もないし、疲れを休めるにはすこし早いと思つたが、まこと、男は民

藏に、何か話があつたのらしい。

「——へ」

と、民藏が顔を上げると、

「お前、どんな量見であるか知れないが、わしが何のために旅に出たか、よく承知してゐるだらう」

「——旦那さま」

「まあ、黙つて聞け。伊藤俊輔は船問屋の伊勢屋へ身を潜め、井上聞多は、別府の侠客灘龜のところへ轉がり込んだ。わしもまた、長州を脱けると、筑前へ走り、別府へ出て、道後に暫く逗留してゐたのも、わしの身分や行動を、世間に知らせぬためである。おうのやお前を共に連れてゐるのも、人目をくります一つの手段だ。それを、供のお前の口から發かれるやうでは困る」

「……………」

「お前の、主人思ひの忠實な性根は、よく知つてゐる。お前がいふんぢやない。酒がいはせるんだとわかつてゐるが、お前はさつき船中で、酔つたまぎれに相客に、ペラ／＼と長州のことを喋舌つてゐただらう」

「……………」

「あの船客中に、一人の幕吏まくりでもあつたなら、わしらを長州人と、すぐに知つたであらう。いやわしの身分は知れずとも、注意されるは當然だ。そんなことがあつては、折角の苦心も水泡すゐぼうに歸する」

「旦那さま——旦那さま」

耐たりかねてか、民藏が口をひらいた。

「相済まぬことでござりました。民藏が悪うござりました。飲めば前後不覺ぜんごふかくとなり、おのれを忘れる自分を、民藏も不甲斐ふがひないことと思つて居りまする」

「うむ。まつたく困つたものよ」

男は、苦笑にがわらひを洩もらしてから、

「わしも、酒は嫌きらひぢやない。飲めば狂激放縱きやうげきほうじやう、人はわしを呼ぶのに、狂兒きやうじをもつてしてゐる。そんなわしだが、しかし、酔つたとて性根しやうねを捉とはれるわしぢやない」

「は、は」

「わしも好きな酒だ。だから、お前の酒を禁じようとも思はん。が、なあ、民藏」

「……………」

酔ひの醒めた民藏が、不安げな眸まぶをまたゝかせると、

「どうだ。お前はこれから、長州へ歸らんかの？」

「ダ、旦那さま」

民藏は、聲を喘あえがせた。

「そ、それでは、民藏は酒癖さけぐせが悪い故、こゝからお暇いひまを下されようと仰せられるのでござりまするか？」

「さうぢやよ」

男の聲は、つめたかつた。顔色も、無表情に近く、

「不本意だが、それも仕方がない。大事の前だ。お前は國へ歸つて、わしが再び世に出る日を待つがよい。それも、長くはなからうと考へる」

「旦那さま——旦那さま！」

ガバと、その場へひれ伏した。

「お許し下さりませ。御勘辨ごかんべん下さりませ。以後、きつと心得まする故、お暇いひまの儀だけは、御容赦ごようじや

下さりませ。民藏にも、どこ〜までもお供をお許し下さりませ」

「……………」

「おねがひにござりまする。旦那さま。酒はフツツリと慎みまする。二度と口にはいたしませぬだから——だから、今まで通りに、お供を仰せつけ下さいませ。もし、お暇を出されましたなら民藏は——民藏は、生きて國へは歸れませぬ」

泣いてゐるのである。大地へ支へた兩の手の甲へ、ハラ〜とこぼれる大粒の涙が見られた。  
「困つたのう」

しんぞこ、困惑したといふやうに、男は、おうのを見返つた。

女氣のおうのは、眼を外らし、これまた、涙ぐんでゐるらしい。

「よし！」

男は、斷乎と首肯いた。

「では、民藏。これだけのことは誓へるか？ 約束が出来るか？」

「は、はい。どのやうなことでも……………」

「性米好きな酒だ。斷つといひ、斷てと強いても、容易に斷てるものではない。たゞ一定の量以

上は飲まぬ。性根を忘れるまでは飲まぬ、といふことが誓へるなら……………」

「はい。お誓ひいたしまする。一滴たりとも、飲みませぬことを」

「は、はは。さうもなるまいが……………。しかし、それまでに約束が出来るなら、今まで通りわしの身邊の用を足してくれ」

「有難うござりまする。有難うござりまする」

民藏は、人が違ふかと思へるほどに歡喜して、またボロ〜と涙をこぼした。

男は、氣を變へるやうに、

「では、ソロ〜出掛けやう」

ぬつくと身を起した。

春の日ざしにしては、いくらが強すぎると思へるくらゐの、南國特有の陽の下を、三人はまた歩き出した。

歩きながら、おうのが問ふた。

「これから、どこへまゐるのですか？」

「いふまでもない。金毘羅さまへ參詣するんだよ」

「それから？」

「は、あ、落付く先を案じてゐるのか？」

晴れた空を仰いで、笑ひをにじました。

「實は、わしも道後にゐる間、このまゝでは済まされぬと考へてゐたんだが、フイと思ひ出したのは、いつぞやの桂の言葉だ」

「小五郎さまの？」

「うむ。金毘羅と地つゞきの榎井といふ土地に、奇人がひとりゐる。桂も以前、相當世話になつたらしいが、わしも、その人を頼らうと思ひついた」

「その人とは……」

「名か？ 名をいつたとて、お前は知るまいが、——日柳燕石、といふ。博徒で、詩人で、志士だ。お前たちは案じずに、わしに従いてゐるが、いゝ」

男は、何かを思索するやうに、遠心的な眼になつて、遙かをぢツと見た。

もう、象頭山のたゞすまひが、鮮かに見える。

その日——。

この三人は、あれから織るやうな參詣人にまちつて、金毘羅の長い石段をのぼり、しばし社頭に何事かを祈念した。

「大變な賑ひだなあ。どこに世間の騒がしさが反映してゐるのか。この金毘羅といふ土地は、まるで別天地のやうだ」

おうのにとも、民藏にともなく、男は、シミジミとさう洩らした。

そして、その日の夕刻。

三人は、榎井村の吞象樓の表に立つた。

「あの……。親分さまに、ぜひお目通りがいたしたうございますが……」

「お前さんは、誰だね？」

取次に出たのは、關門の安だつた。

男は、それに答へて、

「京の紅屋喜助と申します」

「紅屋の喜助さん？」

「はい。くわしくは、親分さまにお目通りの上、申上げたうございます。ともあれ、お手數なが

ら、お取次をおねがひいたします」

「いよ。ちよつと待つておねえ」

こんな客は、珍らしくなかつた。

燕石の住居は、一種の梁山伯なのである。平素から、食客、旅人、博徒など、さまざまの人間が集まり、出入りしてゐるのだから、安は不審も抱かずに、すぐと二階の居間にゐる燕石に、

「親分。京の紅屋喜助といふのが、親分にお目にかゝりたいといつて来て居りますが……」  
と告げた。

「なに、紅屋喜助だと？」

燕石は、ギョロリと眼を光らして、

「安。どんな男だ？」

「齡は二十七か八。三十にはまだなつてゐないやうです。身装は堅氣に違ひありませんが、どうやら一癖ありげな面魂で……」

「ふうむ……」

ちよつと、考へ込む様子に見えたが、

「は、あ。長州の高杉晋作だな」

と呟いた。

「安。會つてみよう。粗相のないやう、これへ御案内するがい」

「——へ」

安は、身をひるがえした。

紅屋喜助とは、何者かの變名であることがすぐに知れた。

當時の志士が匿名して、刺客の害から避けてゐたことは、隠れない事實であつた。坂本龍馬が大谷梅太郎、吉田松陰が瓜中萬二、三條實美が梨木誠齋、伊藤俊輔が春山花輔、井上聞多が花山春輔、品川彌二郎が橋本八郎などと名乗つてゐたことは、相當よく知られてゐる。

また、長州の高杉晋作が、備後屋助次郎、谷愛介、紅屋喜助などと稱してゐることも、燕石は早くから聞いてゐた。

おうの、民藏を連れて燕石を訪ねた男は、まことに、高杉晋作であつた。

齡は若いし、瘦せ形で、町人姿はしてゐるけれど、彼を見たたん、隙のない五體から強い壓迫を人に感じさせるのも道理ではあつた。

高杉晋作の傳記に、かう書いてある。

高杉晋作——名は春風、字は暢風、東行と號す。晋作は其通稱なり。山口藩にして幕末の勤王家を以て知らる。晋作、幼より器識超邁、好んで詩歌を賦す。既にして之を廢し、専ら兵書と研究す。十九歳の時、吉田松陰に謁す。松陰、曩に久坂通武を得て少年の奇才と爲す、今又晋作の來るに及んで大いに喜び、以て門下の双對とす。然かも、通武の老成の風あるに反して、晋作は大壯語言して人を侮るを以て、松陰は常に通武を揚げて晋作を抑ゆ。晋作之を悟り、以來奮勵、學業大に進む。文久元年の春、擢んぜられて世子の近侍となる。二年三月、藩主の命に依り、幕吏に従つて上海に航して其形勢を視察す。八月、歸藩復命し、同年冬江戸に至る。尋で、久坂通武、大和直利等と謀つて、御殿山の洋館を焚かんとして果さず遁れて京都に入る。三年夏歸藩し、自ら松下村塾に塾す。六月、攘夷の事を議するに及んで晋作、藩主に請ふて新に兵を編し、力めて門地の弊を矯め、士庶を論ぜず、祿を厚くし、強健の者を選びて訓練す。名けて奇兵隊と云ふ、晋作及び通武、是れが隊長たり……。(以

下略)  
晋作は、十九歳で吉田松陰の門下生となつたが、久坂玄瑞と並べられ、同門の雙壁とまで讃稱された俊傑だつた。

藩の世子毛利元徳に近侍したのは二十三歳の春で、江戸へ下ると、早速と贊を執り、勤王儒者として名聲高かつた大橋訥庵の門へはいつて、熱心に經義を學んだ。當時、強いられて通商條約を結んだ徳川幕府の腰の弱さに對し、米英の使臣たちは輕侮の情念を高め、まるで日本を一呑にしたやうな態度で、江戸市中を横行してゐた。それを見て憤慨した儒者の藤森弘庵が、

叱叱叱叱又叱叱

汝西洋の犬耶咄

何爲れぞ我内地を横行する

叱叱する天山是れ絶筆

の詩を絶筆として憤死したのも、この頃であつた。藤森弘庵は、名を大雅、字を淳風、俗稱恭助、弘庵はその號であり、またの號を天山といつた



その弘庵の、大義名分に立脚した高論は、時代の民心を強くひきつけ、彼の門に出入しない志士は、殆んどなかつたやうである。自然と、大老井伊直弼の眼が光り、安政の大獄には、容赦なく弘庵を禁錮した。けれど、掴むべき罪状の事實がなかつたから、致し方なく、その翌年の十月に放還したのだつた。

弘庵は、そのことを怒つて隠居したが、彼の名望は却つて高くなるばかりで、依然として憂國の志士がその門に出入りした。そして、文久二年十月八日、年六十三歳で病歿したのだが、死の寸前まで幕府の非違を罵倒し、絶命に臨んで詠んだ詩が、それである。弘庵は、のちに従四位を贈られてゐる。

その詩の意味は、井伊大老の専断により、日米通商條約を締結したゆえに、江戸市中に碧眼兒が横行するやうになつた。その外人たちを、犬かと叱したのは表面で、實は、幕府の失政を憤慨したのだが、この絶筆に志士たちは共鳴し、愛國の血を湧かした。

高形晋作も、その一人だつた。彼は、久阪玄瑞、大和直利らと謀つて、横濱の外人居館を焼き拂はうとしたのだつた。

が、圖らずも、事前に毛利元徳の知るところとなり、長州へ歸されて、そのまゝ松下村に幽閉

される身となつたのである。

けれども――。

その後、藩論が勤王攘夷説に移行していつたから、その幽閉を釋かれ、自由の天地に濶歩することとなつた。奇兵隊を組織したのは、その頃であつた。

晋作の大酒は、有名だつた。飲めば、狂激放縱、人が彼を呼ぶのに「狂兒」をもつてするの

も、そのゆえだし、晋作自身もまた、

「わしは酒の火だ」

と、放言してゐた。しかし、彼の本心は、酒に力をかりて、燃える憂國的な鬱憤を晴らしてゐたのではないだらうか？

そんな晋作の行動や噂は、燕石もまた、よく傳へ聞いてゐるところだが、當人に會ふのは、けふが初めてである。

待つ間もなく――。

關門の安に案内されてはいつて來たのは、紅屋喜助を名乗る高杉晋作であつた。

「……………」

「……………」

燕石も、晋作も、無言である。

視線と視線が絡み合つて、その瞬間、火花が散つたか、とも見えた。

とたんに、燕石がニツコリする。

「よくお越しなされた。さ、ずつとこちらへ——」

自分から立つて、晋作のために、座蒲團をすゝめるのである。

「は、有難うございます。どうかお構ひなく……」

まだ安がウロ／＼してゐるから、晋作は、町人らしい大人しい口調で、當らず觸らずの挨拶をしてゐたが、安が階下へ降りて行つたのを見届けると、

「先生ッ—」

ほとばしるやうに呼んで、座をすべつた。

「突然、御静居を騒がせましたが、拙者ことは……」

「知つてゐますよ、高杉君」

燕石は、おだやかに笑つた。

「堅苦しい辭儀は、抜きにませう。あなたが長州の高杉晋作とは、すでに承知してゐるわしだし、そんな切り口上は、あんたらしくもない。また、こゝはやくざ者の集る加島屋の住居だ。ザツクバランで話ませう」

「——先生」

「會ふのは、けふが初めでも、お互ひに名は聞き知つてゐます。お互ひの心は、一つのものを目指して燃えてゐるのだ。同じ目的に向つて精進してゐるのだから、初対面といふ氣はしない。高杉君、膝を崩して下さい。くつろぎなさい」

「燕石先生」

晋作は、フツと胸に熱いものを感じた。

まるで、大きな翼の下に庇はれてゐるやうな安らかさを覚え、

(さすがは、南海の大親分……)

と、シミ／＼、その信頼感に心を打たれた。

燕石の方でも、晋作の直情が、よく通るのだつた。

男と男である。多くを語る必要もなかつた。二人は、十年の知己みために顔を見合つて、

「高杉君」

燕石は、晋作の身装に視線を向けて、

「あんた、一人で來られたのか？ 連れはなかつたのか」

「いや、二人の連れがあります。その二人は、お店の土間の隅に待たせてありますが……」

「それアいかん。こちらへ、案内してあげるがい——。お松、お松」

ボン／＼と手を叩いて、お松を呼んだ燕石は、酒肴の支度を命じると一緒に、表で待つおうのと民藏を、これへ案内するやうに、といつた。

「お手数をかけます」

晋作が禮をいふと、

「さうこそ／＼するところ、あんたらしくないなあ」

燕石は、聲を立て、笑つた。

お松は、すぐにおうのと民藏とを案内して來た。折返して、酒肴を運んで來て、主客の間を執りもつた。

おうのが、しとやかに挨拶するのを聞いた燕石は、

「ほう、あんたが噂に聞くおうのさんか」

と、そのすぐれた容色を見るのだつた。

おうのは、いふまでもなく馬關對帆樓の藝妓である。桂小五郎に於ける幾松、久阪玄瑞に於ける秀勇、とのやうな勤王藝妓といはれるほどではなかつたといふが、

「秘密を飽くまで守るのが、おうのの取柄だよ」

と、晋作も、人にそれを自慢してゐたと傳へられる。

燕石と晋作の間に、二度三度、盃のやり取りがあつてから、

「なあ、高杉君」

燕石が呼びかけた。

「あんたが、こちらへ來られるやうになつたのは、いづれ國家の將來を考へるに就いて迂い連中と、いやな摩擦があつたゆえと思ふが……」

「その通りです」

晋作は、剃刀ほどに鋭い眼を向けた。

「藩の俗論黨が、われ／＼に直接行動をとらんとする形勢をみせましたから、そなたらのために捨てる命は惜しいと、コツソリ國を脱け出したのです。われ／＼といふのは、伊藤俊輔、井上聞多、それに、わたしの三人です」

「して、他のお二人は？」

「伊藤は、馬關にある伊勢屋といふ船問屋へ身を潜め、井上はまた、別府の灘親分の乾分となり、印絆纏に身を包んで豊後に下つて、温泉宿の若松屋へ身を隠してゐる筈です」

「——なるほど」

「わたしも、最初は筑前へ走り、野村望東尼の許へ身を寄せましたが、そこも安全とは申せぬ氣がするから、別府へ出て、あれから伊豫へ渡り、道後の温泉で逗留客に化けてゐましたが、道後では天下の情勢が一向に知りません。七日目に、しびれを切らして船に乗つたのですが……」

晋作は、そこで一息ついてから、冷えた盃の酒をグツとあふつて、

「燕石先生、國許を脱走までのいきさつを、一通りお聞きねがひます」

と、言葉を改めた。

「御承知でもありませんが、さきにわが藩が、長門に於て米艦を狙撃し、怨みを報はんとして、

昨年八月四日、英・佛・米・蘭の四國が聯合し、十八隻の巨艦を率ゐて、わが長州へ攻め寄せました」

この時、徳川幕府は、禁門の變に對する長州藩の責任を詰り、阿波、筑前、因幡、備前、津山、肥後、久留米、薩摩、肥前、安藝、宇和島、松江、龍野、松山（伊豫）、小倉、中津、松山（備中）、柳川、白河、濱田、津和野の二十一藩に命じ、防長征伐の軍を動かしてゐたのだから、實に長州藩は、日本國中を敵にするのみか、更に外國をも敵としたのであつた。

敵の四國聯合艦隊は、まづ一齊に砲門を開いて、前田、壇の浦の兩砲臺を砲撃し、前進して、砲臺にはげしい襲撃を加へた。

が、長州藩の臺兵もまた、一步も退かず、能く防ぎ戦つた。

ために、双方に夥しい死傷を出したが、日が暮れてもなほ勝敗は決せず、物凄い巨弾が夕靄を掠めて飛び、硝煙が黒い幕を垂れたやうに内海を掩ふて、戦ひは何時果てるとも見えなかつた。

ところが、この戦さの最中に、かねて海外へ派遣されてゐた井上聞多（馨）と伊藤俊輔（博文）が、ジャンギリ頭に洋服姿で、眞に突如として英國から歸つて來たのである。

長州藩の上下は舉つて、二人の異様な風采に眼を峙てた。更に、諸外國の進歩した形勢を聞い

て、一層驚いた。

聞多と俊輔は、直ちに山口城にあつて藩主慶親父子と對面し、家老參政らの面前において、世界地圖を開き、國の大小、兵力の強弱、大砲の圖などを示して、

「攘夷は到底行はるべきでありませぬから、この際、攘夷論を捨て、大義名分を明かにし、その勢力をもつて、王政復古のことに盡すべきでござりまする」

と、利害を釋いて、外國との和議を奨めたのだつた。

時しも、幕府は長伐の師をすゝめ、今や大舉して國境に押し迫らうとしてゐるのだから、藩論は、二人の説を容れて和議に傾き、一先づ砲門を鎖して和を結んだのである。

この時、高杉晋作は、聞多と俊輔の二人から、相談をうけた。それは、馬關の開港といふことであつた。

「今の時代は、徒らに門戸を鎖して、外國との通商を阻んでゐる時ではない。船載を容れ、泰西文化を執り、國利を計るべき時であると思ふ。もちろん、この開港は、外國と對等の條件によつてだが……」

と、二人の新智識はいふのである。

晋作も、はじめは熱烈な攘夷派であつた。が、嘗て藩命によつて上海へ視察に行つたことがあるし、常に日本の前途に眼を着けてゐたから、時々刻々に移り變る海外狀勢に、無關心でなかつた。今は、開港の止むなきを知つてゐる。

いや、開港こそ時宜に適した手段と首肯して、

「よからう。力を貸さう」

と、二人に約束した。

そこで、三人はその運動をはじめたが、この開港論を聞いた椋梨藤太ら俗論黨は、

「高杉、井上、伊藤の三人は、講和談判以來、夷狄と密約を結び、馬關開港をもつて外人の歡を買つてゐる賣國奴である。勤王の名に隠れて、私利を計る奸徒である。天誅を加ふべきだ」と罵つた。

罵るだけでない。直接行動に出やうとする形勢も見え、晋作たちの身邊は、すこぶる危険になつた。

それだけでなくとも、藩内は、彼ら俗論黨の恭順説が勢力を占め、長伐に向つた幕軍に對し、ひたすら憐みを乞ふてゐる有様だから、

「是非なし。時節の到来いたすまで、他國に難を避けて……」  
と、三人は、悲壯に決したのだつた。

そして、俊輔は伊勢屋といふ船問屋に潜居し、聞多は別府の俠客灘龜に投じ、その一乾分となつて若松屋に身を潜め、晋作はまた、こゝ畿岐に燕石を訪ねて身を委ねることにしたのである。

「案じられるのは、幕軍を迎へたわが藩が、どんな處置を執つたかといふことです。戦さをしたといふことは、風の便りにも背きません。俗論黨がノサバつてゐるのですから、いづれは満足な解決はつけなかつたであらうと思ひますが……。もとより、この命を惜しんで、逃避した高杉ではありません。王政復古の輝かしい日を迎へるまでは、死んでも死に切れぬ高杉でございます。先生」

さう力強くいつて、晋作が、長い物語を結ぶと、

「さうですとも」

燕石は、大きく首肯した。

「こゝまで来た大勢は、どんな彌縫策を用ひたとて、支へ切れるものではないのです。もうひと振り揺すぶれば、幕府の屋臺骨は、ぐわら／＼と來るにきまつてゐる。高杉君、安政の地震は天

爲だが、こんどの地震は人爲ですよ。人間同志のやる地震だから、犠牲者が出るのは仕方がないが、君の如き有爲な人物には、ぜひと、身を大事にしてもらねばなりません。お案じの長州征伐の仕末については、早速と調べてみませう」

さういつてから、フイと氣がついて、

「おや、お前さん」隅の方で小さくなつてゐる民藏に、聲をかけた。

「一向に盃を空けないやうだが、お前さん、飲けないのかね？」

「はい——いえ」

民藏は、どきまぎして、口をモグ／＼させた。

民藏の前には膳部が運ばれ、銚子もついてゐるのだが、さつきから怖いもののやうに、盃には手を觸れないから、燕石が不審がつて問ふたのである。

晋作が、民藏の酒癖のよくないことや、けふ道中での約束のことなどを、苦笑をふくんで手短かに語ると、燕石は、

「あは、はは」

と、爆ぜるやうに笑つた。

「男だもの、猫みたいに大人しいものも困るが、酒癖の悪いのは、時にとつての愛嬌だ。御主人に叱られたなら、わしが詫びてやらう。遠慮はいらんから、飲みなさい、飲みなさい」  
 磊落にすゝめるのである。  
 そして、晋作を見返ると、

「高杉君——」

フツと、また眞顔になつた。

「あなたのことは、この燕石が一身を抛ち、きつと引受けました。お心易く御逗留下さるがい、」  
 「はッ」

晋作は、思はず居すまひを正した。

「先生。何分ともに……」

「また切り口上ですか。あんたらしくもない。あんたはあんたらしく、狂兒高杉の面目を發揮してくれんと困る」

あはゝはは——と、高らかに笑ふその豪快な響きを聞いて、晋作は、はじめてノビノビしたものを感ずるのでつた。それは、國許を脱走して以來、忘れてゐた安らかさであつた。

——今夜も、金毘羅の町の方角から、遙かに弦歌のさんざめきが聞えて来る。

禍を呼ぶ酒

—

燕石に語つたやうに、高杉晋作は、おのれ一身の安穩をねがひ、逃避し、潜伏するのではなかつた。

もし、單に一身の安きをのみ冀つて隠遁するのなら、別府や道後、または、金毘羅を選ぶ要はないのである。むしろ、木曾山中の三戸の村か、祖谷の溪谷一軒屋の方が適當であつたらう。

しかし、それでは天下の事情がわからない。時勢が窺へない。身を潜め名を隠して、しかも輿論大勢を最も早く知ることの出来る場所といふのが、當時の志士潜伏の必要條件であつた。

晋作にとつても、またその條件が必要であつた。  
 ところが。

金毘羅は、南海隨一の繁華街であり、四時の賽客は、朝に夕に東西の情報をもたらし、交通の

便は海陸ともに南北に八達してゐるのだ。その上、そこには日柳燕石といふ同志であり、俠骨が豪膽と細心とを兼備して大きな翼を擴げ、志士の來るのを待つてゐるのであつた。

これは、高杉晋作ひとりではなく、志士たちにとつての恰好の庇護者であつた。

晋作は、長州の同志入江和作に宛てた密書の中で、次のやうに書いてゐる。

(前畧) 七日ばかり道後に滞在し、それより金毘羅參詣仕り候。當所にて日柳燕石と申す奇人に出會ひ、議論一致、利益少からず候。孰れ此の處にしばらく潜伏仕る覺悟に御座候。益々天下の事情も相判り、目ほどの違ひ候事も有之、後悔罷在候。(中畧)

御存じにも御座候哉。燕石は博徒の頭分にて子分千人許りも有之、學文詩賦も迂生の及ぶところにては無之、實に關西の一大俠客に御座候。迂生もこの地潜伏中、國家の御爲になる事もあるべくと期し居り候。(中畧)

ともかくも燕石が一身を抛つて潜伏致させると申す位に候間、決して御懸念無用に御座候。

(後畧)

この手紙にある、

——燕石は博徒の頭分にて子分千人許りも有之、

といふのは、聊か誇張だが、晋作が、燕石の勢力の偉大さに心を打たれたのは、事實であつたこのあたり一帯は、いはゆる燕石の縄張りであるから、燕石の乾分たちは、種々の情報を拾つて來ては、燕石に告げた。

晋作が案じてゐた長州征伐の顛末も、旬日ならずして、晋作の許にもたらされたのだつた。それによると——。

長州藩には、主戦黨と恭順黨の二派があり、恭順黨の中にも、飽くまで恭順を守るといふのと、武備は武備として恭順する、といふのと二派があつた。そして、支藩の中でも長府侯は主戦黨であり、その他の三家は恭順黨であり、殊に吉川家は、熱心にそれを唱道してゐたのだつた。

この兩派の主張するところは、主戦派は飽くまで君侯を大切にし、之を守護して幕軍に反抗し刀折れ矢盡きて防長二州が焦土になつたならば、藩主父子を朝鮮に奉じ、徐ろに逆襲を謀るといふ、つまり鄭成功の故智に倣つた主義を唱へ、恭順黨はそれを書生の空論であると貶し、それよりも封土を削られれば削られてもよいから、たゞ々恭順を守り、藩祖以來の名家を絶滅させないやうに努めるに如かず、といふのであつた。

ところが、先に京師を逆襲して躰き、外艦の來寇に脅かされ、今また、詔命を奉じた幕府の大



軍が四境に迫つて來たのだから、一時全藩を風靡してゐた主戦論もその勢力を失ひ、まったく恭順黨が勢力を占めるに至つたのである。

それは、晋作もよく知るところだが、その後、どうなつたか、といふと。

恭順黨が藩の去就を左右し、幕府に對し、謹慎して謝罪の意を表すが最もよからう、といふことになつたのだつた。

そこで、藩主父子は、萩町の天樹院に蟄居して謹慎した。

更に、京都を騒がした巨魁を誅戮して名分を明かにし、總督に謝罪する外はないといふので、

その時の責任者たる福原元佃、益田親弛、國司信濃の三太夫にそれを告げると、

「國のため、主君のためといふならば、喜んで死に就くであらう」

と、三人が答へたから、遂にそれと決議した。

福原元佃、益田親弛、國司信濃の三太夫を始め、牛村九郎、宍戸左馬介、竹内正兵衛、佐久間

佐兵衛ら十餘人が尻腹したのは、元治元年十一月十一日であつた。

岩國支藩の吉川經幹が、その首級に嘆願書を添へて、廣島まで來てゐる總督府へ差出したのは

同月十四日である。

總督府では、三家老以下の首を實檢し、

一、山口城を破壊すること、

一、五卿を出すこと、（さきに長州へ亡命してゐた七卿のうち、澤宣嘉は他國に寓し、錦小路頼徳は病死した）

一、慶親父子謝罪すること、

一、激論者を鎮定すること、

等の條件のもとに、五卿は十二月十四日、筑前の太宰府に拘禁され、征長の軍は双を齧らずして終り、十二月二十七日をもつて諸軍は解散したといふ……。

その顛末を傳へられた晋作は、

「うウむ。さうだつたか！」

血を絞るやうな聲で、ボツリと洩らした。

この解決策は、あまりにも長州藩の不甲斐なさを、暴露してゐるやうに思はれたからである。

恭順 謹慎にも、程度があると思はれたのだつた。

「わしが、藩を脱出したことは、手段を誤つたのでないか？」

さう自責する。

あくまでも長州に踏みとどまり、恭順俗論を説へる岩國支藩の吉川經幹以下、棕梨藤太らと抗争し、藩の體面を維持することこそ、臣道を貫く處置といふべきでなかつたか、と考へた。あたら、三國老以下十餘人の生命を失つたことが、悔まれた。

しかし、當時の情勢としては、主戰黨に、晋作の率ゐる奇兵隊ほか、御楯隊、膺懲隊、遊撃隊八幡隊があるばかりで、その主力もまた、桂小五郎は京都の變以來但馬に遁れてゐるし、赤根武人は憤死したし、禁門の變に有力な多數の闘士を失つてゐるのだから、晋作、伊藤俊輔、井上聞多を抜き取れば、僅に諸隊の頭目といふべきものは、太田市之進、赤川敬三、山縣狂介（有朋）野村靖之助、時山直八、久保無三二、堀真五郎らが残るばかりだつた。

この貧弱な力をもつて、藩内ほとんどを占める恭順黨と抗争したとて、龍車に双向ふ蟻螂の斧にひとしく、成就なり難いことは、火を賭るよりも顯かだつたのだ。

それでも、みじめな事實を聞かされた今、晋作には、

「わしは、手段を誤つたのでは……」

と、ひとしほ自らが責められるのであつた。

彼が、入江和作に宛てた密書の一節に、

——益々天下の事情も相判り、目ほどの違ひ候事も有之、後悔罷在り候、と書いてゐるのも、その心情を示したものである。

事實、晋作の憂悶は、彼をして日頃の彼らしい行動を執らせなかつた。その二三日は、おうにもろくに言葉をかけないし、憂鬱な表情をしてゐた。

燕石が、それと見て、

「高杉君、どうしたといふのだ。ちかごろ、元氣がないやうだが……」

と問ふと、晋作は、筆をとつてサラ／＼と書きつけた。

「先生。たゞ今のわたしの心境です」

差出したのは、次の一首である。

名を遁れ跡を潜む

はかりごと無きに非ず

此胸間萬斛の愁ひをいかにせん

我をして君なく又父なからしめば

早くまさに剣を脱して雲遊をなさん

「ほホウ、なるほど」

燕石は、微笑をふくんだ。

「我をして君父なからしめば、とうの昔に丸腰になり、一風流人として暢氣に詩でも樂んだであらう、といはれるのだな。高杉晋作をして大節に突進せしめるものは、君父に報ずるやむにやまれぬ大義である。その心情、胸を打つたものがありますな。が——だが、高杉君」

デロリと、浮かぬ顔付の晋作を見て、

「あんた、すこし焦つてやせんか？」

「……………」

「わしも浮んだ。高杉君、これはどうだね」

燕石もまた筆を執り上げて、それへ書いて見せた。

士は無事の世に生れて

動もすれば不平を作して鳴る

自ら言ふ戦國に生れば

手に唾して功名を取らんと

誰か知らん眞の英雄は

智計隨處に生じ

太平善く財を聚め

亂世善く兵を用ふ

黙讀してゐる晋作に向つて、

「これは、あんたの作に對する答へとしては、いさゝか見當がはづれてゐるかも知れん。しかしわしがあんたにいはんとするところは、わかつてもらへるだらうと思ふが……………」

「……………」

「世の悴々たる男子たるもの、戰國に生れんことのみを望むべきでない。眞の英雄は、太平時の經世家であり、亂世時の兵家である。徒らに亂をのぞんで、焦つてはなりません。なあ、高杉君。天は人に時を與へてくれます」

「——先生」

晋作は、ふか／＼と頭を垂れた。

多言を聞く要はないのであつた。俊鋭な晋作には、それだけで、燕石の胸中深くを知ることが出来た。

「晋作も、やはり小人でした。閑居してゐると、とかく妄想に取り憑かれます。お恥かしい話です。先生、お嗤ひ下さい」  
豁然と、悟るのだつた。

晋作は、時に二十七歳、燕石は四十九歳の年長だから、齡の差でも違ふし、この讃岐潜伏中、晋作が燕石から教へられたところは多かつた。

彼の「東行先生遺文」によると、次のやうな詩が載つてゐる。

日柳柳東(燕石のこと)、余の狂を愛し、余をして閑居を得しむ。終日黙座して舊交を回顧すれば、同盟中の節義に死せしもの、十に八九に居る。余生を偷み愼嘆に堪へず、聊か詩を賦して英魂を弔ふ

眞個關西の志士の魁

英風は我邦を鼓舞し來る

靈魂識るべし遺憾多し

——また、  
猛氣猶ほ餘す十八回

燕石が、晋作の心中を聞いて大いに激勵し、凱歌四首を作つてその雄圖を稱賛したのに対し、晋作は、五絶を作つて感奮の意を現はしてゐる。

柳東、余のために凱歌四首を作る、即ち五絶を賦して其後に題す。

醉中往事を談ず

却つて愧づ虚譽を得たるを

四首天下に存す

狂夫死して餘りあり

燕石の稱賛に對しては、自らを「狂夫」と呼んで、

「晋作は死しても本望です」

と、喜んでゐる彼であつた。

晋作の、燕石を見てゐた心情がこれでわかるし、讃岐にこの知己を得た晋作の意中、さこそと推察されるのである。

その後の晋作の行動は、人が彼を「狂兒」と呼び、自らも「狂激放縦」と稱してゐるやうに  
天衣無縫の濶歩ぶりであつた。

けさ、榎井村の燕石の吞象樓にゐた晋作は、夕刻には、早や丸龜の越後屋で同志と歡談してゐるし、夜はまた、金毘羅の花街で宴を張つてゐる、といふ有様だつた。

この、彼の行動が積極的であり、派出である上に、晋作には民藏といふ酒癖のよくない供が從いてゐる。

そこに災ひがあつた。

二

いつの間にか花が散つて、葉櫻の青さが眼に泌みる季節になつた。

その夕。

燕石は、晋作と連れ立つて、金毘羅の松里庵で盃をあげてゐた。

燕石の戯歌に

雪は餘霞亭、月水明樓

いつそ居續け松里庵

といふのがある。

いづれも屈指の旗亭で、他にも知名の料亭が軒をならべてゐたし、内町だけに紅裾百五十人のたと傳へられるから、金毘羅の繁華が「南海隨一」と稱せられたのも、無理ではない。

この松里庵は、今も勤王料亭として残され、香川縣の史蹟となつてゐる。

「——先生」

晋作が呼んだ。

燕石の清飲微醺を喜ぶのに反して、晋作は、斗酒千鍾を盡すそれで、グビ／＼やりながら、

「先生は、開國移民について、どのやうなお考へをお持ちか、それを承りたいと思ひますが……」  
議論好きの彼だから、さう話題を持出した。

「開國移民？」

燕石は、口へ運ばうとした盃を宙に迷はせて、

「は、あ。なか／＼むつかしい問題ですな」

「いや、先生にはすでに、鋭い御達観がお有りと信じます。ぜひ、お洩らしがいたゞきたいので

す。——先生、諸外國が、わが日本國を手に入れようとしてゐるのは、ちかごろの改まつた問題ではありません。さきに蒲生君平が、沼津侯に書を上つてそのことを論じてゐますが、まこと、多分に理に打たれます」

「……………」

「わが日本國の威武は、萬國に冠たるもので、日本武尊の東征、神功皇后の西伐、ともにわが青史に燦たるものがあります。また、北條時宗が來寇をやぶり、豊臣秀吉が征韓の軍をすゝめた偉業も立派ですし、最近では、薩摩侯が琉球を降し、武田氏が松前を開き、山田長政が暹羅を救ひましたし、濱田彌兵衛の豪膽が紅夷を驚かしたのも、いづれもわが日本國のために、萬丈の氣を吐いたと申すべきでせう。この先人の海外發展と、進取の氣象に對し、今こそ共鳴し、爲すあべき時だと考へます。この時に當り、先生に御意見がないなどは思へません。如何ですか？」

——燕石先生」

さすが、開港論をひつさげて、それゆゑに長州脱出の止むなきに至つた晋作である。整然たる論法で、燕石に迫つた。

燕石は、仕方がないといふやうに笑つて、

「はゝはは、さすがは紅屋さんだ。うまいこと、わしを釣る」

晋作の變名をそのまま、「紅屋さん」と呼ぶのも、こゝが人の出入りの多い料亭だからであつた。

「格別、どう考へてゐるといふでもありませんが——この問題を論ずるには、まづ外國のそれと比較してみる必要がありませう」

燕石は、盃を置いて、さう語り出した。

「英吉利國は洋中にあつて、四面天嶮、まことに地の利を得てゐるから、隣邦も憚つて侵さうとはしない。佛蘭王の勢ひを以てしても、なほ寸兵を入れることの出来ない状態です。隣へつてわが日本國の形勢を見るのに、英國に劣つてゐるとは思へぬ地の利を占め、しかも、その人馬は精悍です。それなのに、ちかごろ議論する者の大抵が、英國を恐れるといふのは、どういふものでせうか」

口を開くや、燕石は、イギリス恐るゝに足らず、と論ずるのである。

いつか晋作は盃を捨て、耳を澄ましてゐた。一句も聞き通すまいとする態度だつた。

燕石は、言葉をつゞけて、

「わが國の航海術は、實に素晴らしいものです。日本甲斐といひ、胡蝶軍といひ、みな海寇の名を以て、海上狹しとばかり横行したものでした。近世になつて、その航海術の發展しないのは、海外渡航を禁じ、あまりにも鎖國を密にしたためです。實に惜しい。爲政者の眼が、今すこし開いてゐたならば、わが日本は、富國強兵の實を擧げてゐたでせう。——わたしが開國論の第一とする理由は、即ちこれです」

「……………」

「第二には、精神の點を採り上げねばなりません。考へてみると、西洋諸國では開港以來、英雄と名付けるに足るものは、殆んど見當らない。歴山王・佛蘭帝、その程度ぢやないでせうか。彼らにしても、また、他の高官といはれる者も、すべて小賢しくて、商人根性ばかりです。彼らが眼目とするのは、利、たゞ一字です。しかし、わが日本は建國以來、正しい國是を持つてゐます。八紘を宇となす、これです。この大精神を萬國に示すため、開國のことは必要です。紅屋さん、さきごろ英國は、わが隣那支那を侵しました。それは、支那國民が目覺めてゐないため、こんな結果となつたのですが、わが國にとつて頂門の一針であり、また、わが國が彼を救つて、いはゆる建國以來の國是を發揚せねばなりませんまい」

「……………」

「第三に忘れてならないのは、人口問題です。人口は日とともに殖え、わが民は、殆んど宇内に溢れてゐます。住み難い世の中ちやの何のと愚痴が出るのも、このためです。最近調べたところによると、わが文化十三年から天保元年に至る間に、ヨーロッパ州では三千三百八十四萬餘、さつと三千四百萬の人口が殖えてゐる。ちようど一年に、百人について一人殖えてゐる勘定になるが、それから考へて、わが國でも人口を減ずるの方策を執らねばなりませんまい」

「——先生」

晋作は、思はず口走つた。

「先生は、こゝ讃岐にあつて、ヨーロッパ州の人口増殖の率まで、研究せられてゐるのですか？」

「いや、さう問はれると恐縮するが……」

「恐れ入つた次第です。して、たゞ今お話の人口を減ずる方策といふのは？」

「わが國は、東北で蝦夷に接してゐる。この新天地を開いて、内地の民を移す、といふ手段はどうであらう」

「その方法は？」

「平民百人の中から、遊惰なものを一人づつ擇ぶ。紅屋さん、蝦夷は廣いぞ。お訊ねの移民の實際方法について、わしは、こんなことを考へてゐるが、……。むろん、その遊惰者を移すについても、普通の手段ぢやいかん。罪人の流刑の例に準ずるのです。が、これは机の上の空論と嗤はれやうかの」

「——ふウむ」

晋作は、われを忘れて呻くやうに太い息を洩らした。

當時の識者先覺が、蝦夷に新天地を囑目してゐるのは、彼も、よく聞くとところであつた。が、いま燕石が移民の由に、百人中一人の遊惰者を擇んで蝦夷へ移せよといふ説は、はじめて耳にするものだつた。

何よりも、晋作の胸を強く打つたのは、榎井村吞象樓の小書屋にある燕石が、ヨーロッパの人口増殖の率を知り、ひいてはわが國の植民政策にまで及んでゐる點であつた。燕石の刻苦勉勵がたゞに陳腐なる漢學のみでなかつた點である。

「うウむ……」

またしても、さう太い息を吐くのを見て、燕石は、笑つた。

「あはゝはは、とんだ野暮つたい話に落ちてしまふた。女どもが、退屈してゐる」  
事實、その座に侍る女たちは、客たちの堅苦しい話題に欠伸を嚙み、向ふの隅でコソコソ何か話してゐるのだつた。

「紅屋さん。こんな話は止しにして、さ、熱いのを飲かう」

燕石から盃をさゝれて、晋作は、ハツとしたやうな眼をあげた。

彼もまた、氣がついた。

「さうでしたね。ぢや、ワツと騒ぎませう。——おい、弾いてくれ」

女を促すと、佳い聲で唱ひ出した。

樂はいやだよ、苦勞がしたい

苦勞、しがひのある様に、

晋作が自作し、常に愛誦してゐる「よしこの」である。

また、唱つた。

ところ嫌はずはびこる葵

今に刈りとる菊畠



「ほう。すこし明けすけのやうだが……。わしも唱はう」

と、こんどは、燕石が、澁い、錆ののつた聲で低唱した。

思ひ捨つるな叶はぬとても

やがて匂ふか菊の春

「さすがは燕石先生。——したが、わたしも負けませぬぞ」

笑ひながら、晋作は、

人は武士、氣概は高山彦九郎

京の三條の橋の上

はるかに皇居を伏し拜み

落つる涙が加茂の水

と唱つた。

座は、いつぺんに賑はつた。

そこへ、

「ごめんなさい」

と、顔を出したのは、赤い前垂の松里庵の仲居だった。

「どうしたね？」

燕石が、微醺を帯びた顔を振向けると、

「たゞ今、美馬さんがお越しなさいましたが……」

「なに、君田が来た？」

燕石は、思ひがけないといふ表情になつた。

「それア珍らしい。あの男は飲けない方だから、われから進んで、かうした席へは出ないのだが……。うむ。すぐに通してもらはう」

「——はう」

一旦、退がつた仲居は、すぐ美馬君田を案内して引返して来た。

君田は、この松里庵のすぐ近くに、家を持つてゐるのだつた。

「君田、どうした風の吹き廻しかね？ 貴公からすゝんで、わたしたちの居所を突きとめるなど、めづらしいことだ」

「いや、氣が向いたので……」

燕石の言葉に、君田は、苦笑ひみいたいなものをこぼしながら、短くさういつた。

晋作と君田の挨拶は、場所柄であり、簡単だった。

「紅屋さん。また佳い咽喉を聞かせてもらはうかね——。君田、貴公はまだ、紅屋さんの遊びぶりを知らんぢやろう」

「うむ。拜聴しよう」

晋作は、くすぐつたい表情で、

「美馬さんのやうに鯪こばられると、わたしは、何か悪事をしてゐるやうだ。これでは、唄も出ませんよ」

と笑つた。

が、間もなく——。

座敷は、またしても賑やかになつた。三味の音にまちつて、晋作の佳い聲が流れた。

唱ひながら、飲みながら、晋作がファイと氣づく、燕石と君田が額を寄せるやうにして、何か小聲で話してゐるのである。

君田が、この席へ姿を見せたのは、單に氣が向いただけではない。何か、燕石に告げるべきこ

とがあつて來たのだらう——と、晋作は思つた。

もとより、その話の内容を、ソツと聞き取らうなどと考へる晋作ではなかつた。彼は、去り氣なく、女たちを相手に、なほも唱ひ騒いだ。

晋作が、燕石と君田の話に立ち入る非禮はせず、氣づかぬ態をよそほつたが、實のところ、この話の内容は、晋作に關したることなのである。

君田がいつた。

「逗留のお客について、だいぶ世間で眼をつけ出した様子だが……今も吞象樓をたづねると、お松さんがそのことを案じてゐたから、ともかくも、あとを追つて來たのだが……」

「お松が？」

おうむ返しにすると、

「うむ。あんた達が出かけたあと、佐市駒がどこで聞いて來たのか、ソツとお松さんに告げたので、今にも何が起るか、お松さんは心配してゐたが……」

「なるほど」

「さうしたことは、わしも聞かぬではないのだ。それも、蘇鐵山や備後屋が、いつぞやの騒動の

ケリをつけやうといふので、加島屋の内幕を洗はうとしてゐるといふ風に聞いた。自然と彼らはこのお客に目をつけることにしたらしい」

「蘇鐵山に備後屋？」

燕石は、ギョロリと眼を光らした。

「いや、有りさうな話だ」

「そこで、要慎が肝要だが——わしが考へるには、お客たちを吞象樓で庇ふよりも、いつそこにかへ一軒持たせてはどうか、といふことだ。すつかり、この土地の人間になり切るやうな落付きをみせるのも、一策でないかと思つてゐる」

「……………」

「實は、わしの家の隣が空いてゐる。そこならば、土佐、伊豫への街道の要路だし、この松里庵にも伊豆長にも近い。何かあつたら、すぐに駆け込めよう。また、わしもゐるし、井上文郁もすぐ近所に住んでゐる。何かと都合がいいだらうが……」

「……………」

燕石は、しばらく考へ込んでゐたが、

「一策だの。ともあれ、御當人とも相談した上で、何とかしよう」

話は、それで打ち切られた。

なほ暫くは、飲み、唱つて、賑やかであつたが——やがて。

君田は、おのれの住居へ引取り、燕石と晋作は、女たちの明るい聲に送られて松里庵を出た。

花街はまだ、宵のやうな明るさである。燕石の顔は、よく賣れてゐた。赤い前だれの仲居や、

綺麗に化粧した女たちが、燕石を見ると、きつと親しげな會釋を投げた。

「盛んですなあ」

晋作が呟いたのは、花街の賑はひを指したものか、燕石の聲望をいつたものか。

「先生、すこし歩いてみませう」

何と思つたか、晋作がそれを望むので、燕石は否みもせず、連れ立つて道を折れた。

銅の鳥居を過ぎると、世界が違ふほどの静けさである。赤く濁つた町の空へ、いつばいに鳴つてゐる三味線や笛や太鼓などの交響も、遠いものとして聞えるのだつた。

と。——眞に突如として、

行手の暗闇から、バラ／＼と黒い影が三つ四つ、とび出して來たかと思ふと、

「……………」

ものもいはず、燕石にも晋作にも、バツと打つてかゝるのである。

「な、なにをしやアがる？」

油断のない燕石は、怒號するとともに、その影を拂つた。そして、

「紅屋さん！」

と、晋作の身を氣づかつたが、それよりも早く、手練の晋作は、打つてかゝる黒い影のどこを執つたか、

「くそツ」

地響きを立て、そこへ投げてゐた。

投げられた影は、ウン／＼呻つてゐる。容易に起てない様子だつた。

すると、残りの影は、

「畜生ツ」

と喚いて、それ／＼が抜刀した。夜目にも白い刃の色が、流星ほどに見える。

「来るか！」

晋作は、キツと身構へた。

その前へ、立ち塞がるやうにした燕石が、

「おれを、加島屋の長次郎と知つての闇討か。それならば、まだ抜いたことのねえこの刀の、切れ味を試してみせるぜ」

凄みのある聲でいつた。

相手は、言葉もなく、こちらの隙をうかゞふやうに、チリ／＼と寄つて来る。

「よからう。それならば備前長船、試してみるかな」

燕石が、腰の朱鞘に手をかけると、相手の影は動揺した。

「覚えてろ！」

捨臺辭を残して、地上で呻つてゐる影を助け起すと、そのまま、暗い彼方へ逃げてしまった。見送つた燕石は、

「とんだ人騒がせ……………」

と、晋作を振返つてニヤリとした。

晋作は、勢ひ立つて、

「先生。彼らをひつ捉へて糺明せねば……」

「いや、どこの何奴の悪戯か、わしにはわかつてゐます」

「わかつてゐる？」

わかつてゐて平氣であるのを、不審がる晋作である。

「いゝのですか？ 先生。さつき松里庵を出た時、その表をうかゞふ影があつたから、おびき寄せる氣で、こちらへ來たのですが……」

「さすがは高杉君だ。目が早い」

「しかし、丸腰なので残念でした。せめて短刀でも持つてゐたなら、酔ひさまし旁々、久し振りに血の臭ひを嗅げたのだが……」

「わしの考へは違ふ」

燕石は、晋作の血氣をたしなめるやうに、

「日本刀は、正義の兵器です。いづれこの劍によつて、紺腫赤髮の夷狄を斬る日が來るでせう。いや、それよりか先に、斬らねばならぬ者がある。その日が來るまでは、むやみに抜いてはならぬ刀です」

「……」

「わしは、安政四年に、欲しくてたまらず、この備前長船を買ひましたが、いまだその切れ味を試してゐません。また、わしが今日まで、どんな時にも抜かぬのは、その大事の目を待つからです。彼ら如き虫けら、斬るも刀の穢れと思つて居りますよ」

「……」

晋作は、黙つてしまつた。言外の戒めが、よく通るからである。

「どれ、歸りませうかな。おうのさんが案じて、待ちかねてゐるだらう」

何事もなかつたやうに、踏み出した。

さうしながらも、何かの思案に捉はれる燕石だつた。

三

足音を亂して驅けて來た影は、そこに、筆太に蘇鐵山と書いた油障子を押し開け、土間へとび込んだ。

こゝ金毘羅領で巾を利かす、蘇鐵山光藏の住居である。

親分の蘇鐵山は、茶の間の長火鉢の前であぐらをかき、折柄訪ねて来てゐる同職、備後屋九平と盃を交してゐた。

「もう竹の野郎ら、戻つて来る頃だが……」

さういふ蘇鐵山も備後屋も、どちらも四十がらみ、さすがに、親分貸元と呼ばれるだけの貫祿を備へてゐる。

そこへ――

「親分、たゞ今歸りました」

と、顔を出したのは、いま駆け込んだ連中であり、まつさきに膝をにじらしたのは、蘇鐵山の口へのぼつた渡邊の竹、この一家の兄哥株である。

四つ五つ、そこへ並んだ顔を見廻して、

「おオ、戻つて来たか」

待ちかねてゐたといふやうに、蘇鐵山は、すぐに問ふた。

「で、どうだつた？ 首尾は」

「へい、それが……」

竹が言葉をにこすと、横から、床百といふのが、どこか軀が痛むのか、澁面をつくりながら、「親分。加島屋に泊つてゐるあの客は、親分のお見込み通り、どうやら侍らしうござんすぜ」といつた。

蘇鐵山は、眼を光らし、

「うむ。おれアさう睨んでゐるのだが、確かなところを突きとめて来たのか？」

「へい、ま、多分さうだらうと……」

「さうだらうと？」

「――親分」

こんどは、また竹が呼んで、

「床百はあの客のため、したゝか投げられやアがつたんで……。それで、床百が申します。身内のなかでも喧嘩ツ早いおれを、あゝも綺麗に投げるからは、奴は侍に違ひねえ。あの投げ手は、きつと柔術の一手だと――」

「お前たち、斬りかゝつてみなかつたのか？」

蘇鐵山が、齒がゆさうに問ふのである。

蘇鐵山一家では、やはり相當に名を賣つてゐるもんべの兼が、

「仰有るまでもございませぬ。あつしたちは、すぐに抜き合せたんでござんすが、こちらが斬りつけるより先に、加島屋が、あの男の前へ立ちました」

「加島屋が？」

「へい。加島屋のやり方は、故意かと考へれば、さうとれます。あの男に、手を出させねえやう氣を配つたんぢやありませんまいか」

「それでお前たち、どうしたんだ？」

「それが……その——」

「加島屋に怒鳴られてもして、逃げて来たのか？ 竹、兼、床百、どうなんだ？」

と問ふても、誰もが首垂れてバツ悪さうにしてゐるから、蘇鐵山は、イヤな顔つきになつた。

「ちえッ。不甲斐ねえ奴らだ。そんなこともあらうかと考へ、身内でも兄哥面をし、ゐるお前たちを行かせたんだ。それを、みんなが皆、尻ツ尾を巻いて歸つて來やアがるとは……。備後屋のお恥かしい話だ」

見返ると、備後屋九平は執成し顔で、

「ま、相手が相手だから、勘辨してやんなよ。それに投げられてみて、これア侍らしい、と勘ぐる事が出来ただけでも、お手柄といふもんぢやねえか」

「さうなんですよ、親分」

と、備後屋の言葉に力を得た床百は、

「考へりや考へるほど、奴が侍だつた氣がします。親分、それだけわかれば、加島屋の鼻を明かすことが出来るぢやござんせんか、ねえ、倉敷の代官所へ、加島屋長次郎は素性の知れねえ侍を匿つてゐると、密告しませうか？」

「待て。あわてるんぢやねえ」

蘇鐵山は、考へ深い眼になつてゐる。

「たゞ侍らしい、といふだけぢや話にならねえ。紅屋喜助と名のつてゐるあの男が、薩摩か長州か、土佐の脱走侍か、せめて、その生國だけでもわかりやいゝんだが……」

「ぢや、親分」

もんべの兼が、身をのり出して、

「加島屋一家の三下奴なりしよつ、引いて來て、痛めつけて吐かせようぢやありませんか」

「馬鹿をいつちやいけねえ」

言下に、一蹴した。

「こいつばかりはイマ〜しいが、加島屋の奴、うまく乾分たちを養つてゐる。あの身内にや、そんなことをしたつて、實はこれ〜と泥を吐く奴は、一人もゐねえだらう。それよりも……」

ちよつと、空眼になつたが、

「竹。あの紅屋喜助といふ男は、たしか供を連れてゐるな」

「へい。民藏とかいふ間抜け面をした……」

「間抜けかどうか、案外、お前たちより、確かり者か知れねえぜ」

さうたしなめてから、

「あれは、すぶの田舎者だ。こいつはものになるかも知れねえ。お前たち、その民藏とやら、籠絡するんだ。そして、主人は何處者か、うまく聞き出してみねえ」

「お易いことです」

「安受合をして、しくじるなよ。とにかく、焦つちやならねえ 上手に機會を掴むんだ」

「へい……」

「誰が名づけたか知れねえが、南海隨一の大俠客の何のと、ちかごろ加島屋は、すこしのぼせてゐやがる。だいたい博徒の分際として、いやに學者ぶり、詩などをひねくるのが氣に入らねえ その加島屋の鼻を明かさうといふんだから、みんな、油断なくやるんだぜ」

「へい、今點でござんす」

渡邊の竹はじめ、一同は、コックリと首肯いた。

この夜、燕石や晋作を襲つたのは、蘇鐵山一家であつた。お松や美馬君田の危惧は、事實となつて現はれたのである。

蘇鐵山が燕石に含むところは、今の彼の述懐どほりであるが、その矢面に立ち、規はれた民藏こそ、災難だつた。

それから——十日ばかり日が経つた。

あの日、晋作に誓つたやうに、その後の民藏は、好きな酒を慎んでゐた。

燕石も飲み、晋作も飲む。加島屋身内には飲み手が多く、何かのあとではきつと酒になつたが民藏は、黙つてそれを眺め、我慢をつゞけて來たのである。

あれまでに好きな酒であつた。それを封じられて、シヨンボリしてゐる姿は哀れだから、燕石



の口添へもあり、晋作は、強いて禁酒をいひ立てず、むしろ飲むことを許した。で、民藏はまた盃を手にもすることもあつたが、晋作の言葉がよほど徹へたものか、深酒はせず、自ら戒めてゐた。だから、案じられた民藏の酒にも、何事も起らなかつた。

その晩、民藏は、乾分の彌八といふのにすすめられ、晋作から暇をもらつて、金毘羅の寄席へ講釋を聞きに出かけた。

大阪から渡つて来たといふ講釋師の能辯は、田舎者の民藏を酔はせるに、充分だつた。

席が閉ねて、ドツと一度に出る客に揉まれて、民藏は、連れの彌八を見失つた。が、榎井へ歸る道は承知してゐるから、格別不安がもしなかつた。

民藏は、たつた今聞いた難波戦記の、夏の陣の豪壯であり、また絢爛たる悲史に、まだ酔つてゐた。

「よかつたなあ。明晩もまたお暇をいたゞいて、あの続きが聞きたいものだが……」

そんなことを思ひながら、榎井への道をとつてゐたが、フィと鼻をかすめる佳い臭いを嗅いだ見れば、軒先につるした大きな提燈に、

——さけ、さかな、

と書いてゐる。

繩のれんの向ふから、人いきれと酒の香か、なま温く洩れて来る。

魔がさした、といふべきであらう。

(時刻もまだ早いやうだから、ホンの一杯だけ……)

あれ以來、飲まずにゐたのなら、その誘惑も、さほどに感じなかつたらう。が、毎夜の膳にすこしづつでも飲んでゐるのだから、この誘惑に克てなかつた。

民藏は、フラ／＼と、繩のれんをくゞつた。

飲みながら思ひ出すのは、いま聞いて来た難波戦記である。講釋師の一語一句を心のうちに蘇へらせ、チビ／＼やつてゐるうちに、いつか一本、三本と銚子が空になつた。

「い、晩ですね」

ふと、話かけた者がある。

氣がつくと、いつの間に来たのか、自分の横で空樽を床几にし、飲んでゐる男があつた。

すこし酔つて来た民藏は、愛想よく男の言葉をうけた。

「ほんに、結構な晩でございます」

「かう季節がよくなると、いつそ酒がうまくなる。とりわけ寝酒といふやつは、たまらん味ですなあ」

「ほんとうに……」

「酒飲みつて奴は意地の汚ないもので、寒けりや寒いで一杯飲もうだし、花が咲くと花見酒、季節がいゝの、やれ寝酒のと、勝手な御託をならべて飲んでゐる。仕様のない代物、といふわたしが、それなんだからね。あはゝはは」

男は、話がうまかつた。

知らず知らずのうちに、民藏は、その話術に惹き入れられてゐた。

「一杯ゆきませう」

と、差出した男の盃を、拒みもせずを受けた。

もちろん、民藏からも盃を返す。その獻酬のうちに、二人は、すつかり打ちとけた。

あきらかに、民藏は酔つてゐたのである。あるじ高杉晋作の身上の大事を考へるなら、見知らぬ男の盃など受けられぬ民藏であるのに、何の不審も感じず打ちとけたといふのも、酔つてゐる證據だつた。

やがて、

「も、もう飲けません」

といふ、民藏の呂律は怪しい。

「いろ／＼御馳走になりました。スツカリ酔つばらつて……。ソロ／＼おいとまをせぬことは……」

「いや、まだいゝぢやないか。も一杯、飲ませう」

「いえ、こ、この上飲んでは、歩けなくなります。はい、いろ／＼と有難うございました」

「さうかね」

男は、強いてとはいはない。

勘定を拂つて、民藏と肩をならべて外へ出た。

「あア、いゝ氣持だ。酒飲みは、一人では寂しい。お前さんがあてくれたので、わたしも、今夜はいゝ氣持になつた」

「御馳走さまでございました」

「さう禮をいふと、損をするよ。あはゝは、すこし蒸すやうだね。このまゝ歸つたとて、すぐに

は寝つけない。お前さん、そのあたりまで附合つてくれないか」  
「はい」

否みもせず、民藏は、男と同じ方角に踏み出した。  
久しぶりに腹いっぱいを充たした酒は、民藏を有頂天にした。この一瞬は、榎井へ歸るべき自分を忘れてゐた。

どこをどう歩いたのか、民藏は知らない。

「はい、男は、何気なく問ふた。」

「お前さん。生國はどこだね？」

「はい、長州で……」

ウツカリ、民藏は答へてしまつた。

とたんに——。蘇鐵山一家の床百は、ギョロリと眼を光らした。

言葉も、急に鋭くなつて、

「さうか、長州者か？ して、お前の主人の名は？」

「え？」

民藏は、ハツとした。忘れてゐた性根を呼びさましたのである。

「長州だといふお前の主人の名を、聞いてゐるんだよ、民藏さん、器用に吐かないか」

わが名を知られてゐることに、ギョツとした。酔ひも醒めた心地だつた。

「い、いえ、そんなこと、存じません。はい、何かのお間違ひでございませう」

「あはつはは。白ばれるなよ。お前が榎井の加島屋に泊つてゐる、紅屋喜助の供の者だといふことは、とつくの昔に知つてゐるんだ。その紅屋は何者か。侍名は長州の誰か、それを聞いてゐるんだ」

「知りません。存じません」

といふが早い、身を翻えしてバツと駆け出さうとしたが、そこに立ち塞つてゐる二つの影を見て、心底から恐れた。

渡邊の竹に、もんべの兼である。

「床百、御苦勞だつたな」

といふ竹の言葉に、

「まつたくよ。こんな役廻りで飲む酒は、ちつとも美味くねえ。が、やつと、長州だ、と吐きや

アがつた」

床百の答へは、いつぞ民藏に絶望を感じさせた。

不意に、民藏の影が跳りあがつて、行手を塞ぐもんべの兼に武者振りついた。

が、民藏の力で、なにほどのことが出来よう。しばらく、上になり下になり揉み合つてゐたが床百も竹も手を添へたので、民藏は、ついに用意の縄で縛られてしまつた。

「ふ。骨を折らせやアがる」

三人は、顔を見合つてニヤリとした。

「——親分」

渡邊の竹の呼ぶ聲に、向ふの木立のかけから出て来た大きな姿は、蘇鐵山光藏である。

「みんな、御苦労だつたな。——床百、歸つたなら、鱈腹のませてやるぜ」

「ヘイ、有難たうござんす」

「オイ！」

蘇鐵山は、大地に轉がつてゐる民藏を見た。

傲岸な口調で、

「どうだ、素直に吐かないか。あの紅屋喜助は長州の誰か、そいつを訊かうぢやねえか」

「……………」

「お前の口から、長州だといつたんだ。だから、その先も吐いちまひねえ。それとも、忠義立てして黙つてゐるといふなら、痛い眼をみせるぜ。どうだツ」

「……………」

民藏は、黙つてゐた。身動きもしないのである。

空に、明るい月があつた。

その月光に浮き上つた蘇鐵山の面が、凄いくらゐに歪んだ。

「よしツ。いふなよ。あくまで、その口を割るなよ」

と、氣味の悪い駄目を押してから、

「竹ツ」

「——ヘイ」

「責めろ。痛い目を見せてやれ！」

「合點です」

ズイと寄ると、芋虫みたいに身を縮めてゐる民藏を引き起し、

「ほらッ。どうだ！」

バシッ、と音立て、二つ三つ頬を見舞つた。

「ア、痛ッ……」

「いてえか？」

「し、知らないものを……」

「野郎ッ」

と、蘇鐵山は、土足で民藏の顔を蹴上げ、

「知らねえといふなア、申上げますといふ枕言葉だ。そんな白を切つたつて、その手に乗るおれちやねえ。吐かせッ。言へ！ひと語いふのが遅れるたびに、手前の面がおれの土足で、だん／＼に歪むんだぞ」

バラ／＼と、冷めたいものが降りかゝつた。吹きつける風に、その巨松の梢が身ふるひして振るひ落した白玉の雫である。

こゝは象頭山下、といつても、すこし奥へはいつてゐるから、象山の幽翠を背に負つて、閑古

鳥でも啼きさうに錆てゐる。

遙かに響いて来る弦歌のさゞめき。

それは、いつも耳にするものではあつたが、冷々とした夜氣の深々た中で聞くその音は、何となく、蘇鐵山らの鬼の心をも寒くさせるやうだ。

蘇鐵山は、眉に光るやつを、手の甲で拭きながら、

「どうだ？ 飽くまでいはねえのか。おい、奴、紅屋喜助と名乗つてゐる手前の主人は、長州の桂小五郎か 井上聞多か、それとも高杉晋作か。おうッ、吐かさねえか！」

またしても、バツと蹴上げた。

蘇鐵山光藏も、親分と立てられるほどの男である。さして、時世に迂くないから、「長州」と聞いたとたんに、思ひ出したのは、それらの志士の名であつた。同時に、燕石の鼻を明かすといふ單純な計劃が、意外な拾ひ物をしてゐることに、彼の心は躍るのだつた。

こゝは、どうでもその名を聞き出さねばならないと焦つて、  
「竹ッ。締めろ！」  
と命じた。

「ヘイ」

答へると、渡邊の竹は、手にする民藏を縛つた繩の端を、グル／＼と民藏の喉に絡ませ、グンと引つ張つた。

「う、うーむ」

「どうだ。知りませんといふ音を止めねえうちは、かうして根くらべだ。おい、塩加減はどうだな？」

「ううむ……」

民藏は、繩の輪に喉笛をしめられて、苦しさを眼を吊りあげる。

「竹ッ。もそつと締めろ！」

「ヘイ。——これでどうだッ」

と、竹がジリ／＼締めるのを、覗き込むやうにして、蘇鐵山は、

「まだ甘えか？　おい、もすこし締めさせようか」

「くツ……く、くるしッ」

「それア苦しいに極つてゐらあ。吐かねえからは、まだ／＼この上、いゝ目を見せにやるぜ」

「ま、待つて下さい……」

「待てといふからは、その名をいふのか？」

「は、はい……待つて、待つて下さい」

「よし」

ニヤリとして、

「竹。どうやら性根にしみたらしい。緩めてやれ」

「ヘイ。命冥加な野郎だ」

と、竹が繩の輪を緩めた時だつた。

どうしたのか。民藏は、ガバと俯伏しになつた。

「ヤッ」

驚いて引き起してみると、蒼ざめた民藏の唇から、タラ……と糸を引いたのは、眞赤な血だつた。

「オ、親分ッ。舌を噛み切りやアがつた」

「畜生！」

掌中の珠をうしなつたやうに、蘇鐵山は、後味の悪い顔つきで、舌打ちした。

「惜しいところだつたが……。が、まアいゝだらう。長州者と知れただけでも、とんだ拾ひ物よ倉敷代官所へ届けるにしても、鼻が高いといふもんだ——。しかし、奴ア桂か高杉か、いつてえ誰だらうなあ」

諦めたといふ口の下から、なほ残り惜しげに、さう呟いてゐたが、

「竹、兼、床百、歸らうぜ」

もう先に立つて、踏み出してゐた。

誰も、民藏の骸を見返りもしない。

あとに、寂寞たる中で、名の知れない夜の鳥が、グワツと、無氣味な啼く音を響かしてゐた。

次の日の朝早く。

民藏の死體は、榎井の燕石宅へ運ばれた。

「あッ、これは……」

ゆうべ、歸らぬ彼のことを案じてゐた人々は、變り果てたその姿を見て、思はず一掬の涙をこぼした。

身代り就縛

「高杉君——」  
 燕石が、無表情に近い顔つきで晋作を呼んで、  
 「君田が、あなたに家を持たせようといつたが、先夜の闇討一件もあり、澁つてゐたのはよいことだつた。民藏さんがこれだ。あなたの身も、どんなことになつたか知れない」  
 「……………」  
 「折角お預りしたものの、いよく危くなつたやうだ。とにかく、大事の物は處理して置いて下さい。まだ二三日は大丈夫と思ふが……。乾分たちを走らせて、様子を探らせてみよう」といつた。

——つひに、その日が來た。

時は、一雨欲しい農繁期、降れば田植をはじめようと、農家ではその準備に忙しい慶應元年閏

五月三日。

「許せよ」

ノツソリと、丸龜魚屋町の越後屋へはいつた侍は、一人でない。ゾロ／＼と、十四五人の一團だが、十人ばかりは土間をのぞいただけで、左右に散つた。

越後屋の外堀、帯を、見張るのである。

役人であることは、すぐに知れたし、その一人が、

「倉敷代官所手附の者だが……」

傲岸に名をつた。

「不審の儀があり、お調べぢや」

「これは、御苦勞さまでございます」

鬼みたいな役人を、まるで佛のやうなニコヤカさで迎へたのは、内儀の村岡箒子であつた。

残りの色香を、その眼もとにたくえて、

「そこは端近でござります。ともあれ、おあがり下さいませ。——お調べには、わたしが御案内いたしますから、とにかくも……」

「いや——うむ」

生返事をしたが、家宅捜査が眼目だから、役人たちは首肯き合ひ、箒子の導くまゝ、奥の間へはいつた。

すぐに、

「何はなくとも……」

と、酒が出る。肴が運ばれる。

「倉敷からわざ／＼のお越し、船路でもお疲れが出ませうし、御空腹でもござりませう、突然のことで、何の用意もござりませぬが、まづ一盞おすこしを……」

下へも置かないもてなし振りである。

「いやアこれは……」

役人たちは、破顔した。

こんなことは、おのれ達の役徳、と考へてゐる彼等である。遠慮なく盃をあげ、箸を執つた。さうしながら、

「越後屋の御内儀」



と、一人が呼んだ。

訊問にしては、いさゝか風変わりであるが、

「ちかごろ、當家へ見馴れぬ男が、よく出入りしてゐるといふが……」

「まあ、誰がそのやうなことを……」

と、箏子は、美しい眉をひそめた。聲にも、憂ひをふくませて、

「誰が告げ口するか知れませぬが、大勢の男を召使ひ、わたしが女主人であるゆえに、とかくイヤな噂を立てられます。よく御注意下さる人もあり、わたしは、死んだ主人に濟まぬと存じて居ります。でも、もうこんな齡なのですから……」

わざと呆けるのである。

役人は、首を振つて、

「いや、さうぢやない。御内儀の道心堅固は、われ／＼の耳にも聞えてゐる。越後屋の女主人は、まこと當代の節婦ぢや、などとの」

「まあ、あんなことを……」

「わたしが出向いたのは、そのやうな家庭内の密事ではない」

「では？」

「あなたの兄の小橋安藏は、當京極家で 注意人物ぢや。よからぬ企てを抱く嫌疑により、投獄幽閉せられたことも、一度や二度ではないぞ」

「……………」

「その安藏の縁につながるあんたちや。當家へ出入りする怪しい人物も、十指にあまるといふからは、いづれ安藏などと聯絡のある人間であらうとの御嫌疑ぢや」

「お役人さま」

箏子は、凜然と呼んだ。

「お言葉のやうに、なるほどわたしは、圓座の小橋安藏の妹でござります。したが、ご存じのやうに、當越後屋へ嫁してゐる身であります。女が一旦嫁いだな、その家は死場所、生家など無いも同然、と申すほどではござりませぬか。わたしは、亡き村岡藤兵衛の妻、その藤兵衛には兄弟姉妹とてありませぬから、わたしにも兄などはありませぬ」

「……………」

「安藏がどのやうなことを考へ、何をいたしませうとも、今のわたしの關らぬこととござります

る。それを、安藏やすざうに關つてのお疑ひは、心外しんがいでなりませぬ。また、當越後屋は醬油醸造かじゆを稼業かせぎといたして居りますから、大阪、京都、中國筋からも、しよつちう顧客かきやくさまがお越しなされます。見馴れぬ人とは、その人たちのお目違ひではありませぬか。とにかく、どのやうなお調べをうけませうとも、一向かうこう苦しいわたくしでござりますれば、お調べの上、お疑ひをお晴らしねがひたくござりまする」

キツパリといひ切つた。

あまりにハツキリした答へだから、

「ふうむ……」

と、あとが續かぬやうに、役人たちは顔を見合つた。

別な一人が、

「それはそれとして……」

と、話題を改めた。

「御内儀。那珂郡榎井村の加島屋長次郎といふ博徒ばくざをご存じか？」

「加島屋さん？ お名前はうかゞつて居りますが……」

「知つてゐるのは、名だけではあるまい」

筆子の眸まなこを讀むやうに、ちツと見据えて、

「加島屋長次郎で通じねば、日柳燕石ひやうえんせきではどうだ。博徒ばくざに不似合ふにあひあの學識がくしきがあり、ちかごろ、どかくの噂うわさを立てられてゐる。どうぢやの？ 御内儀」

「存じませぬ」

筆子の答へは、やつぱり冷靜れいせいだつた。

「當家は堅氣けんきでござりまする。博徒ばくざなどと、お附合つあひあはいたしませぬ」

「しかし、加島屋に止宿しじゆくするものが、當家を訪ねることがあると、去る筋から聞いてゐるのだが……」

「お役人さま。では、何でござりまするか。わたしが、何か耳新しいことをお告げいたしたならお役人さまは、一も二もなくそれをお取上げあそばしまするか？」

筆子は、逆襲さか襲した。

けれど、その語調ごてうはおだやかだし、顔にも笑みをたゝえて、手は、絶えず役人たちの盃さかを充たしてゐるのである。

「お母さん」

母の箒子とともに、その座にゐた宗四郎が呼んで、

「そちらの銚子が空のやうですから、熱いのを入れてまゐりませう」

「さうしておくれ。それから、お吸物が冷めたやうだから、それも新しくね」

「はう」

宗四郎は、しづかに座敷を出て行つた。

母子の會話には、何の變哲もないから、役人たちは氣にもとめなかつた。

が、臺所へさがつた宗四郎は、空の銚子をそこへ置くと、ソツと店先をのぞいて、

「石松」

店で働いてゐる小僧の石松を招いた。

「——はう」

と、近づく石松の耳へ、何事か、宗四郎が囁くと、大きく首肯いた石松は、そのまゝ表へ駆け出した。

「おい、待てッ」

表を見張つてゐる捕吏は、この小粒な男をも咎めた。

「どこへ行く？」

「あたしかい」

齡は十二の石松だが、確かりものの少年である。

「奥へ来てゐなさんお役人さまのために、富屋町の魚勢へ、お料理の註文に行きます」

「ふむ、さうか」

「行つてもいい？」

「構はんが、道草せずに、早く歸れよ」

捕吏は、年長者面してそんな注意まで與へ、石松を放つた。

「はう」

と、けなげに一禮して、後とも見ずに石松は、一散に走り出すのだつた。

これは越後屋に於て、早くから、計劃してゐたことであつた。倉敷の代官所から手入れがあるだらうといふことは、燕石の方からも通知があつたし、そんな時には、これ／＼しようと、箒子の胸のうちに出来てゐたのである。

大人の使ひでは、人目を惹く。が、少年ならば、見張りの捕吏も油断するであらうと考へたが果してそれは効を奏し、石松はうまく虎口を脱した。

石松は、丸龜から南へ一本道の金毘羅街道を、韋駄天走りに走つた。

彼が榎井村に着いた頃には、晴れてゐた空もいつか曇つて、今にも一雨來さうな暗さだつた。

「なに、越後屋さんの使ひが？」

乾分の知らせに、燕石は、晋作と顔を見合つた。

燕石の方でも、丸龜への船着場に對する警戒は、おこたつてゐなかつた。さつき、倉敷代官所の役人が、その丸龜へ上陸したといふことは、見張の者から傳へられて來てゐる。

だから、美馬君田をも呼び寄せ、晋作と三人、

「どうするか？」

と、額を鳩めてゐたところである。

そこへ、越後屋から、石松少年が使ひに來たといふ。

石松を呼び迎へると、

「たゞ今、倉敷からお役人がまゐつて居ります。御寮人さまは酒を出し、お役人をもてなしてい

らつしやいですが、やがてお役人は、榎井、金毘羅へもまゐりませう。だから、すこしも早く高杉さまを、讃岐からお逃がしなされますやうにと、左様に傳言でござりました」

石松は、老成た口調で、さう告げた。

「さうか。それア御苦勞だつたな」

と、燕石は、少年の勞をねぎらつて、

「したが、越後屋さんの例の地下室にも、二三人匿はれてゐる筈だが、その人たちはどうしたらう。うまく逃げたかな？」

「はい。御寮人さまがもてなしていらつしやる間に、皆さまは地下道から、港口へお逃げになりました」

「は、はは。さすがは筆子さんだ。いつもながら、鮮かな手際だの」

三人は、笑ひをふくんだ。

「御苦勞だつた。あちらでユツクリ憩んで、飯でも食つて歸るがい。お松、何か御馳走をしてあげな」

「はい。お小僧さん、こちらへお入り」

「有難たうございます」

と、石松が、お松に伴はれて去るのを見送つてから、

「さて——」

と、燕石は、晋作を見た。

「高杉君。いよ／＼焦眉の大事が来た。わしは、いつまでも匿つて差上げたいと思つてゐたが、お聞きの通りの仕儀だ。早急に、讃岐を脱出していたゞかねばならん」

「はッ。して先生は？」

晋作が問ふたのは、まづそれである。

燕石は、微笑して、

「わしのこととは、御心配下さるな。どうせ博徒の日柳燕石です。あなたを逃がしたことを咎められたとしても、もとより、最初からの覺悟なのだから……」

「先生、それはいけません」

晋作は、叫ぶやうにいつた。

「この若輩の高杉を、かくまでお目かけ下さる御厚情は、晋作、死すとして忘却いたしませぬ。そ

の大恩人たる先生を、危急の中に残してわたしだけ、讃岐を去るには忍びません。いや、晋作の心が許しません。先生。この金毘羅にて捕へられるのも、また天命と諦めることが出来ます」

「高杉君」

燕石は、冷めたく呼んだ。

「あなたは、國家の事を爲す大丈夫ではないか。大丈夫の道たるものは、大君に對する忠誠に極まるのだ。今は、情誼に溺れる場合ではない。この道理が、わからぬあなたではあるまい」

「何と仰せられても、晋作には出来ぬことです。先生が御一緒にお逃げ下さるならともかく、わたし一人が逃げ、災ひを先生に残したとあつては、天下の同志に顔向けがなりません」

「高杉君！」

燕石は、しづかに色を作した。

「あなたは、そんなに小さな人間だつたのか。情に囚はれて、事を誤る人間だつたのか。わしが命を投げ出してあなたを匿つたのも、また命を捨て、あなたの讃岐脱出を計るのも、あなたが立派に事を爲す人間だと思へばこそだ——。しかし、この觀方は、わしの誤りだつたのかも知れん」

「……………」

燕石の慨嘆を聞いて、晋作は、黙つてしまつた。

「なあ、高杉君。わしがあんたを庇ふたのは、あんた個人のためではないぞ。わしの願ひはもつと高く、もつと大きなところにあるのだ。その願ひについて、あんたとわしは、よく論じ合つてゐたではないか」

「……………」

「のう。高杉晋作は、今の日本に、そして、これからの日本に必要な人間だ。新日本のため、正しい日本の復興のため、わしは、春秋に富む高杉晋作の身代りにならうといふのだ。五十に近いこの燕石が、心に望みながら爲せずに来た大事を、高杉晋作といふ若者に、代つて成し遂げてもらひたいとねがつてゐるのだ。高杉君、わしはあんたを、高く買つてゐるのだよ」

燕石の聲に、濕つたものが感じられた。

それだけでなく、燕石の眞摯な精神に、胸を打たれてゐる晋作である。

「先生ッ！」

と呼ぶと、膝をにじらして、ヒシと燕石の手を握つた。

「かたじけのうござりまする。もう何事も申しませぬ。先生の有難いお心を頂戴し、晋作は、當

地を脱けまする」

「おッ」

「そして、一先づ長州へ歸り、その後の藩の動靜をうかゞつた上、先生の御期待どほりに、立派に働いてみせまする」

「よく言つて下された。燕石は満足です」

「先生ッ！」

燕石から、手を握り返へされた晋作は、ポロポロと涙をこぼした。

ヨ、と咽び泣く女の聲は、そばで聞いてゐたおうのだつた。

美馬君田も、眼をしばだいてゐる。

燕石は、傍らの朱鞘の刀を執りあげて、

「高杉君」

と晋作の手に握らせた。

「燕石の身代りです。征夷の日、倒幕の日、この刀も功を樹てる機会にめぐまれるであらうと、寸時も傍を離れたことのない備前長船です。が、どうやら、わしには無用となるらしい。されば

刀はあなたの手で抜いて、國賊を斬つて下さい」

「先生」

「英雄は、三尺の劍をもつて天下の風塵を定める。しかし、誤つて匹夫の勇を學んだなら、一人の敵より倒せない——といふ言葉は、絶えずわしが、この劍に誓つてゐたところです。高杉君。南海の一小屋で磨きをかけたこの日本刀を、立派に生かして下さい」

「先生ッ。必ず——必ず」

晋作は、喘ぐやうに誓つた。

匆忙の中、長話は許されない。今にも丸龜から、晋作を求めて、倉敷代官所の役人たちが襲つて来るかも知れないのだ。

燕石は、しきりと高杉脱出の秘策を練つてゐるらしい君田を見返つて、

「君田。何かいゝ思案があるか？」

「さ、それだが……」

と、君田は眼をあげて、

「尋常の手段ではいかん。多度津街道を出ても、丸龜からも、また高松方面へ廻れても、すぐに

追捕の手のびるだらう。また倉敷の捕吏たちが、高松、丸龜兩藩の加勢を得て、沿道はもとより、港々を警備することは當然考へられる」

「なるほど」

「そこで一策だが……この道案内には、古市麥舟を立てゝはどうかと思ふ」

「おオ、麥舟」

「彼ならば、このあたりの地理に精しいから、役人たちの裏をかくことが出来よう」

「よからう。すぐに麥舟を呼ばう」

燕石の使ひは、急遽、同志である古市麥舟を迎へるために走つた。

麥舟のことに就て、彼の傳記に、かう書いてある。

古市麥舟は名は騰、通稱は藤兵衛、雙木舎と號す。三豊郡觀音寺村に生れ、十七八歳の頃仲多度郡吉野村に來り、暫く素封家新名氏宅に居る。古市氏の爲め贅して養嗣子となる。爾來村吏として年久しく職にあり、又和歌俳句を善くし、今田茗哉、上里青節等と其技を競ふ、殊に和歌に長ぜり。而して勤王の志厚く、日柳燕石、美馬君田、後藤田水、奈良松莊等と常に脈を通じ、其家に密議するありき……。

麥舟は、すぐに來た。そして、彼が立てた脱出案は、

「道を迂回して象頭山を越え、三豊郡財田村上ノ村から伊豫川之江に出て、そこで一泊、明日は船を雇つて長州へお送りする。それで如何でせう？」

といふのである。

彼は、吉野村の古市家の養子となつてゐるが、十七八歳ごろまで三豊郡に育つた男だから、金毘羅から川之江へいたる街道の地理には、最も精しかつた。

「よからう」

といふことになつた。

「麥舟。頼んだぞ。高杉君は大切な軀だ。われくの身代りとなつて、大事を爲してくれる人である。道中、くれぐれも心して……」

燕石の言葉に、麥舟は、

「大丈夫です。この藤兵衛が命に懸け、きつと成し遂げまする」

確乎と首肯した。

燕石は、旅支度を急いでゐる晋作に、

「高杉君。これで、もうお目にかゝれぬかも知れぬ。軀をいたうて、必死とお國のためにお働き下さい。燕石はどんな境涯にあつても、いつもあなたを思ひ出してゐるであらう。いや、いつまでも、あなたの心の中に生きてゐるであらう。たゞ民藏さんを失つたことが、痛恨事だが……」

「先生。かづくの御親切に報ふ道は、滅私報國、それ一つだと、晋作は信じて居ります。長州へ戻つてからの晋作の働きを、風の便りにもお聞き下さい」

「それを聞いて、もう何もいふことはありません——。おうのさん。高杉君の力になつてあげて下さい。あなたが身を捨て、高杉君に仕へることが、どんなに高杉君を勇気づけるか。また、女の踏みゆく道は、それたゞ一つです」

「は、はい。親分さまにも、どうぞ御機嫌よろしく……」

女氣のおうのは、はや涙ぐんでゐた。

もう心残りが無い、といふやうに、燕石は、君田を見返り、

「君田、出かけよう。芳橋樓へでも行つて、わしの君田書きでもやつてもらはうか」

晋作たちより、一足先きに吞象樓を出た。

「おや、降つて來たぞ。この雨に、お百姓衆は喜んでゐよう。のう、君田、のどかな田植歌が聞



えるぞ」

しとど降り出した雨の音の中で、晴れ／＼といつてゐる燕石の聲か、澄んで聞えた。

二

この、高杉晋作の讃岐脱出について、種々の説が傳へられてゐる。即ち、多度津港から乗船したものである、といふ多度津説と、丸龜港から乗船したに違ひないといふ丸龜説との二つである。

金毘羅から長州へ向ふ者にとつて、いちばん便利とする道は、多度津街道を北へ下つて多度津港より乗船するか、または、これと併行する丸龜港からの乗船であるが、美馬君田もいふやうに晋作をねらふ幕吏が、高松、丸龜の兩藩に應援を求め、沿道はもとより、港々に張り込んだのは當然であるから、この二説は、尤もな想像であるとともに、危険な想像である。

また、脱出までのいきさつについても、色々に語られてゐる。

「高杉晋作」傳記には――

晋作を求めて捕吏が襲來した時、晋作は、酒樓にのぼつて酒を汲んでゐたが、それと知るや、

持ち合す金銀を捕吏めがけて投げつけ、彼らが躊躇する間に屋根傳ひに逃げ出し、燕石宅に立ち寄つた。そして、お松から少許かの路銀を借りうけ、おうのとともに海岸へ奔ると、そこに舫つた小舟に乗り、跡白浪と漕ぎ出した。捕吏たちが海岸へ馳せつけた時は、遙かに遠く、波間に浮かんでゐた。それは、閏五月四日のことであり、燕石と君田らはその日逮捕された……

といふ意味のことである。

「東行先生略傳」には、晋作が頼つた讃岐の日柳燕石は、俠客であり、立派な學徒であり、また勤王家であるから、その人の世話になり潜伏したが、その後幕府の偵察吏に、「あれは長州人」と嗅ぎつけられたので逮捕の一步前に辛くも讃岐を脱出した。燕石は、そのため幽囚の身となつた。五月中旬の出来事……

と、たゞ漠然とその意味が書いてある。

更に、琴平附近で傳へられて來てゐる説といへば、

雨降りしきる日、晋作を求めて高松藩の捕吏が馳せ向ふと知つた燕石は、

「事、急なり。早々にお逃げなさい」

と、晋作に告げた。

咄嗟の機轉で晋作は、數葉の艶書を三味線の糸に挿んでそこへ捨て、室内は、徳利、茶碗などを轉がして杯盤狼藉をよそほふと、おうのと一つ傘にはいつて逃げ出した。

その直後、駆けつけた捕吏たちは、あまりな部屋の様子に、

「長州の高杉晋作といへば、天下に知られた人物である。その高杉が、こんな艶書を弄び、また斯くまでに狼狽して逃げようとは思へん。察するに、高杉と面ざしの似通つた盗人の類であらう追捕は無用——」

と、口々に罵つたといふ……。

以上が、晋作脱出の異説である。

が、前後の事情や、古市麥舟が道案内に立つたといふ資料が出てゐる點から考へても、この脱出説のいづれも、信じられないのである。

讃岐の日柳燕石研究家として名のある草薙金四郎氏も、これらの脱出説を否定され、麥舟の道案内によつて象頭山を越え、捕吏とは反對の三豊郡財田村上ノ村から伊豫川之江へ出て一泊、翌朝舟を雇うて長州に遁れ歸つた、といふ説を強調せられてゐる。

作者も、この説に信を置くものである。

却説——。

燕石と君田は、雨の中に傘をならべ、のどかな足どりで榎井を出ると、金毘羅の町へはいつたその姿を見ると、匆忙の中に秘策を練り、急遽高杉晋作を遁した人とは思へない。遊心勃々、平和な心境にある人と見える。

もとより、それを意識する燕石であつた。蘇鐵山光藏や備後屋九平の身内が、どこかで警戒の眼を光らしてゐるといふことは、考へられることなのである。彼らに、高杉晋作脱出の事を知られたなら、一大事である。だから、燕石は、晋作たちより一足先に、かうして金毘羅へ姿を見せたのだ。

(加島屋が、かく吞氣にしてゐるから、まさか高杉は……)

といふ、相手の油斷を購はんがためであつた。

この燕石の企圖は、みごとに効を奏した。

事實、蘇鐵山の身内が、榎井と金毘羅の境界に張り込んでゐたのだが、燕石のさうした姿を眺めて、

「は、ははは、何も知らずにゐやアがる。いまに、倉敷のお役人が来るといふのに……。さまアみやがれ。その吠面が見てえもんだ」

彼らは、ドツと聲を立て、笑つた。

燕石は、その氣配を知つてゐた。君田を見返つて、ひそかに苦笑をふくんだのだつた。

二人は、内町のよしまや吉右衛門の軒をくぐつた。

「よしまや」は、また芳橋樓と呼ばれ、當時から著名な料亭でもあり、屈指の金毘羅宿でもあつた。芳橋樓の名は、かの頼山陽が命名したと傳へられてゐる。

現在、琴平の門前町にある「敷島館」は、この芳橋樓の跡で、館内の一部には舊「よしまや」時代を偲ぶ建築物等の観るべきものが保存され、香川縣の史蹟として指定せられてゐる——。

燕石と君田は、二階の一室に落付いた。

「お六さん。いつ見ても綺麗だね。早くいゝお婿さんを持つがいゝ。なんならこの加島屋が、世話してやらうかね」

燕石は、顔馴染の仲居に、そんな冗談をいつた。

「まあ、親分さんとしたことが……」

仲居は、顔を赤らめた。

加島屋の親分さんは、今夜はとても御機嫌がいゝ——階下へ降りた仲居が、帳場でさう噂したほど、燕石の機嫌は、ばかによかつた。

「いゝ雨だなあ」

開け放つた窓外を眺めて、君田にいふでもなく、呟くのである。

行燈の灯の流れたそこに見られるのは、銀糸のやうな雨だつた。

「君田。例の君田書きを頼まうか」

促された君田は、

「心得た」

と首肯いて、仲居に、料紙と硯を運ぶやうに命じた。

世に「君田書きの柳東」といふのが流布されてゐる。これは、君田が代筆した柳東（燕石の別號）落款の意味である。燕石とは影の形の如き君田だから、酒間に、または歡談裡に、彼は黙々として常に座隅にあり、燕石の詩や語を揮毫してゐたのだつた。

用意が出来たと見て、燕石は、

「では、はじめよう」

盃を口にふくんだ。軽く眼を閉じた。

君田は、筆を握った。  
すると。

窓外の雨の音に掻き消されず、張りのある燕石の聲である。  
「題して、高山彦九郎——」

自ら皇家に通ず草莽の臣……。

ユツタリとした語調ではじめた。

君田の握った筆が、紙の上へ、雄渾に走った。

自ら皇家に通ず草莽の臣

半生の慷慨は天真より出づ

一鞭打破す姦雄の墓

是れ子胥同様の人ならず

寛政のころ、林子平は、その著書により海防論を唱へて幕府要路の覺醒を促し、高山彦九郎、

蒲生君平は、諸國を巡遊して尊王精神を有志の間に鼓吹したが、この三人を指して「寛政の三奇人」と呼ぶとは、誰もが知るところである。

そして、また、彦九郎が室鳩巢の書いた楠公論を讀んで憤慨し、  
「腐儒、我が國體の尊嚴を知らず！」

と罵つて、これを地上に擲つたといふ話も、有名であり、諸國遍歴の途次、足利尊氏の墓をさぐつて、これに三百の鞭を加へたことも廣く傳へられてゐる。

——燕石は、それを詠んだのである。

明治十一年、畏くも朝廷に於かせられては、かれ彦九郎に正四位を贈らせられ、また上野太田町に祠を立て、之を祭り、高山神社と稱されてゐる。

蛇足にならうが、「高山操志」によつて、彦九郎の事蹟を知ることによしう。

かう書いてある。

字は仲繩、名は正之、通稱を彦九郎といふ、良右衛門の子、世々上野國新田郡細谷村に居る家農を業とするも、州の舊姓たるを以て苗字帯刀を許さる、彦九郎早く父母を失ひ、祖母の鞠する所となりしが、年甫めて十三、太平記を讀み、中興の忠臣が志業の遂げざるを見て、

大いに發奮し、十八にして京に出で、書を學ぶこと二歳、乃ち廣く交を求め、又四方に周遊し、至る所の賢豪長者と交る、

彦九郎高邁にして氣節あり、嘗て室直清（鳩巢）が、楠公が召に應じて、直ちに笠置に至れるを論じて、度量足らず、宜しく諸葛亮（孔明）の三顧して廬を出でしが如くなるべしといへる書を見て、憤然として曰く、腐儒何ぞ迂なるかなやと、書を取りて堂下に投ず、是より先、魯船屢々蝦夷に往來し、邊海を窺察せるを以て、彦九郎これを憂ひ、自ら虜情を探らんとし、寛政二年北遊の途に上り、南部津輕を経て蝦夷の境に入り、奔走日を累ねしが、既にして忽ち回顧の志あり、海路より京都に至り、三年更に西遊し、五年また京都に歸る、會々鴨川の涘に於て緑毛龜を得て大いに喜び、以て祥瑞となし、伏見宣條に謁して之を呈す宣條即ち 光格天皇の天覽に入る、而して此際また別旨により密に天顔を拜するを得たり、我をわれと思召かやすめらぎの

玉の御聲のかゝるうれしさ

といへる歌は、其時の詠なりといふ、

後久うして彦九郎遂に意を當世に得ず、居常快々として樂まず、再び西海に遊び、筑後久留

米に至り、森主膳の家に寓し、居ること數日、忽にして病める處あるが如くなりしが、五年六月二十七日悉く手記するところの書を破棄して自殺す、人その故を知る無し、自らいふ狂せるなりと、しかも東方帝都及び故國に向つて拍手再拜、嚴然端座、吏の檢視を待つて歿せるを見れば、或は他に事由の存するなるべし、時に年四十七、同地遍昭院に葬る……

「のう、君田」

君田が雄渾の筆をふるつたおのれの詩に、ぢつと眼をつけてゐた燕石は、

「高山彦九郎先生は、慷慨悲歌の士であつた。その志しは、申すまでもなく尊王にあり、四方を歴遊して足跡天下に普きは、みな人心を激勵して、義氣を鼓動せん意であつたが……。惜しい哉、時を得られなんだ。もし當代に、彦九郎先生があつたならば……」

「まつたくなあ」

君田も、撫然とするのである。

「英雄時機を得ず……。わたしも、一詩うかんだ。観ていたゞかう」

サラ／＼と書いたのは、

扼腕して賦碑を鞭うち

涙を揮つて式微を慨く  
夙に尊王の道を唱へ  
未だ回瀾の時に逢はず  
丈夫は徒らに死せず  
丹心は天地知る

といふのであつた。

「君田、よく出来たぞ」

一讀、燕石は、さう讚へた。

「まことに、丈夫は徒らに死せず、丹心は天地知る……ぢや。時至つて、彦九郎先生の志しを繼ぐ者が現はれた。高杉晋作がそれ。烏滸がましいが、燕石もまたそれだ」

「微力ながら、美馬君田も……」

二人は顔を見合つて、うすい笑ひをつくつた。

窓外の雨は、なほ激しい。

この時。

「親分ツ——親分！」

あわたじしい聲と、足音である。

燕石と君田の静かな表情の前へ、ぬつと顔をならべたのは、關門の安、佐市駒、風呂仲、倉ヶ關など、加島屋身内の兄弟株が六七人。いづれも勢ひ立つた顔つきで、

「親分ツ。一大事でございます」

「なんだ。どうしたといふんだ？ 折角の酒具のさまたげ。話があるなら、静かにいはないか」

燕石は、落つき拂つてゐた。

佐市駒が、まづ膝をにじらして、

「親分。そのお咎めのお詫びは、後にいたします。ともあれ、この場はすぐにお逃げなさいませ  
暫く、草鞋を履いておくんなさいませ」

「なに、逃げる？ 草鞋を履けと？」

燕石は、チラと君田を見返つてから、

「それアどういふわけだ？ この加島屋は、逃げるの何のと、うしろ暗いことをやつた覚えはな  
すが……」

「いや、親分」

關門の安が遮つて、

「今は、そんな詮議立てをしてゐる場合ぢやございません。實はたつた今、倉敷の代官所からお手當がございました」

「うむ。それで？」

「この春から御逗留の客人を、お召捕のためだつたんですが、御富人はすでに御出發のあとだ。それゆゑ、親分がお咎めをうけなされることになりましたんで」

「ほウ」

「姐御が出て應對なさつてる際に、あツしらは、裏から抜けて宙をとんで來ました。親分。さういふうちにお役人は、こゝへも押しかけて來るでござんせう」

と、佐市駒が、安の言葉を逐つて、

「そんなことになつちや、間尺に合ひません。この場はこのまゝ、お逃げなさいませ。あつしらが、お願い申します——、なあ、さうだらう？ みんな」

「さうとも——。親分。草鞋を履いておくんなさい」

「のち／＼のことは、至らぬながらあつし達が引受けます」

燕石の身の無事をねがつて、乾分たちは、口々にいふのである。

その純情は、燕石の多感な胸を打つたが、

「あはゝはは」

燕石は、爆ぜるやうな笑ひを笑つた。

「おい、みんな」

と呼んで、

「なるほど、お前たちの心の内が、わからぬ長次郎ぢやねえ。いや有難いと思つてゐる。が——が、逃げたとあつちや加島屋は、何か罪を犯してゐたことになるぢやねえか。うしろ暗いことがあればこそ、逃げるんだ」

「ですが、親分」

「まア聞け——。やくざであれ、加島屋長次郎は、不正なこたア大嫌ひだ。天下の大道を、大手を振つて歩けねえやうなこたアしちやアゐねえ。それを、何か御不審があると仰有るなら、どこへでも行くぜ。お調べをうける。逃げるの、草鞋を履くのと、そんなこたアしたくねえ」

「——親分」

「もういふな。黙つて、おれのすることを見てゐるがい」

低い、ハッキリとした語調である。

これ以上、何をいつても無駄だといふやうに、燕石は、かたく口を噤つた。

その嚴しい顔色を仰ぐと、乾分たちは、何もいへなかつた。

そこへ。

また、足音がしたかと思ふと、

「親分……」

お松の白い顔がのぞいた。

すこし蒼ざめてはゐるが、お松は、取亂してはゐなかつた。言葉も、しごく平静であつた。

「おオ」

と、ふり仰ぐ燕石に、

「倉敷から、わざわざの御出役でございます。何かお前さんに御不審があり、その行先へ案内しろとお言葉なので、こゝまでお連れいたしましたよ」

お松の言葉に、ハツとどよめく乾分たちを、  
「これッ」

と、叱つてから、燕石は、居すまゐを改めて、

「さうか。それア御苦勞だつた。こんなところで失禮だが、お通りねがつてくれ」

「はッ」

と、振向くお松を押しつけるやうにして、ワラ／＼と踏み込んで来たのは、倉敷代官所の役人  
たちである。

中の頭立つた一人が、

「日柳燕石こと加島屋長次郎」

「へッ」

「御不審の廉あり、たゞ今より同道いたす」

「へい。何處へとも……」

「お取調べの相済むまで、高松藩獄舎へ入牢を申附くるぞ。神妙にいたせよ」  
聲に應じて、捕吏の一人が、燕石のうしろへ廻つて、バラリと捕縄をしごいた。



それと見て、

「あツ、親分ツ」

佐市駒はじめ、乾分たちは、我れを忘れて總立ちとなつた。とたんに、

「静かにしねえか！」

かつて聞かれぬ、燕石の激しい聲である。

「御用の遮げをする奴ア、加島屋の身内ぢやねえ。今夜限り、親分乾分の縁を切るからさう思へ！ いゝか、みんな」

「……………」

聲もなく、一同は、ヘタ／＼とその場へ腰をくづした。

「加島屋、神妙の至りぢや」

役人は、大きく首肯してから、チロリと君田を見た。

「其方は？」

「美馬君田にござりまする」

「うむ。汝にも不審があるぞ。加島屋ともども、同道せい」

「はッ」

君田もまた、繩を打たれた。

「兩人、立てい」

「……………」

燕石と君田は、顔を見合つてニツコリした。そして、二人が一步踏み出すと、

「オ、親分ツ」

乾分たちは、涙聲である。

燕石は、微笑をふくんで、

「みんな、達者で暮しなよ。このまゝ、おれが戻らなくとも、かねて教へた通り、みんなは行ひを慎みねえ。その命を、おのれ一人のものと思はず、大切にするんだぜ。今にお役に立つ目が来る。いゝか」

「へ、へッ」

「——お松」

見れば、お松は、袖を眼に當て、忍び泣いてゐたが、  
「は、はい……」

「泣く奴があるか。おれが望んでゐたやうに、目出度いおれの門出なんだ。笑つて送らねえか」  
「——す、すみません」

「今となつて、間違つてお前でもねえだらう。留守は頼んだよ」

「は、はい」

答へる聲も、涙に消えてゐた。

燕石は、如何にもサツパリしたといふ顔つきで、

「お役人さま。お手間をとりまして相済みません。さ、お供いたします——。君田、仲良く行かうよ」

さう促すと、われからすゝんで座敷を出て行くのである。

表はいつか、雨がやんでゐた。

七日ばかりの月が、象頭山の肩にかゝつてゐるのが見える。

誰が告げたともなく、芳橋樓の表には、彌次馬が群れてゐて、繩付の燕石の姿を見ると、

「わアツ……」

と、どよめいた。

「どうしたといふんだらう。加島屋の親分ともある人が……」

「お咎めは、なんだらう。賭博宛状か、それとも、喧嘩でも？」

「やつぱり、あの人も只の親分だつたのさ」

そんなことを囁く聲が、燕石の耳へも届いた。

燕石は、フツと微笑を誘はれた。

その燕石に、

「お父つあん」

と呼びかけて、轉ぶやうに彼の前へ立つた者がある。

燕石の子の道之助だつた。

道之助は、父燕石が博徒であるのとは違つて、早くから京師に遊學して醫術を修め、つい先ごろ、榎井村字六條に開業したばかりだつた。お松にとつて腹異ひの子の道之助は、この時、二十七歳である。

「おオ、道之助か」

さすがに、燕石の面にも、チラと悲痛の色が淀んだ。

道之助は、はや濕つた聲で、

「お父ツあん、どうなされたといふのです。このお姿は……」

「何も聞くな。折角醫業を開いたばかりのお前に、こんな父の姿を見せるのは酷だが……。道之助。お前に、これだけを言ひ残したい」

「……………」

「父がこんな姿になつたのも、みんな時勢だ。町人のおれが、心に定めた道を踏むには、これより他に手段がなかつた。だが、道之助。お前は、この父を眞似るんぢやねえ。父が踏んだ、權道の忠義をやるんぢやねえ。いゝか、こんな忠義の勵み方は、おれ一代で澤山だ。お前は、もつと正しく歩きねえよ」

「お父ツあん！」

「ぢや、しつかり勵みねえ」

縋りつかうとする道之助の手を、振り拂ふやうにして、燕石は、まつすぐ行手を見て歩き出し

た。

そして、不意に朗々と吟じはじめた。

賊々々、

天子に敵するものは、皆これ賊なり、

賊々々、

國賊は、獨り外國の賊のみならざるなり。

得意の一首である。

抑揚はゆるく聲は澄んで、燕石の胸中を知る者も知らぬ者も、思はず耳を傾けたほどであつた。燕石は、しづかに歩を運んでゐた。

この時、燕石は高松藩の獄舎に投ぜられたのだが、天領榎井村の人間である彼が、なぜ高松の獄舎につながれたか？ 一應、疑問とさせられるところであるが、それは、かうであつた。

榎井、五條、苗田の三村が天領となつたのは、讃岐の國を東西に分けた時の「打出し餘り地」だといふ。總高十七萬石餘を分割して五萬石を西領（丸龜）とし、十二萬石を東領（高松）としたから、こゝに榎井、五條、苗田三村の餘地を生じ、これを公料としたわけで、高は二千二百八

十九石三斗七升一合、そのため、この三村は寛永十九年以降代官の管轄するところであつた。ところが、元治元年十一月三日、幕府は突如としてこの三村の天領地を、爾後五ヶ年間を限つて高松藩に託したのである。

つまり、高松藩が、この天領の總支配となつたのである。

天領者の日柳燕石が、高松藩の獄舎につながれたのも、かうしたわけであつた。

### 獄舎の歌

一

獄舎の夜は、蒸し暑かつた。

けれど、この獄中の生活こそ、燕石の生涯に、いちばん静かな毎日であつたらう。

そこには、金毘羅の町を埋める弦歌も聞えぬし、また家事の多端や、乾分たちの喧騒もない。

明け暮れ、獄舎の床に端座し、過ぎ越し方を顧み、皇國の行末を想ふ毎日である。

(高杉は、どうしたか?)

何よりも、それを考へるのである。

無事に脱出してくれたか? いや、脱出してくれぬことには折角の身代りも無駄である。

(なにとぞ!……)

心から、晋作の無事を念じるのであつた。

燕石には、悔ひがなかつた。

晋作の若さや、その旺盛な活動力を考へると、この身代りに、大きな喜びを感じる燕石である

「高杉晋作は、今の日本に、そして、これからの日本に必要な人間だ。新日本のため、正しい日

本の復興のため、わしは、春秋に富む高杉晋作の身代りにならうといふのだ。五十に近いこの燕

石が、心に望みながら爲せずに来た大事を、高杉晋作といふ若者に、代つて成し遂げてもらひた

いとねがつてゐるのだ。高杉君、たのんだぞ!」

晋作に告げたあの言葉は、まさに、彼の心の叫びであつた。

晋作の身代りとなり、この高松藩の獄舎につながれたことに對し、

(爲すべきをなした)

といふ、安らかな心でゐられる燕石であつた。